

う餘りに見えさせ給ふ。いつも物のめでたき中にも、さは是れを御賀とは云ふにこそ有りけれ。是れをめでたきものの例には云ひ語るべし。前前の昔の御賀どもも、いと斯くしもやとぞ推し量らるる。其後、殿の御前、七大寺巡りに歩りかせ給ふ。さまざまに御心の暇もおはしまさぬに、御有様の盡きもせぬを世の例に語り續け書き置くべきやと見えさせ給ふ。されど斯様の折参り見るには、心慌ただしうて、其儀式たしかに見覚え難う、また音ばかりに傳へ聞く人、はた況いて如何でかは、いと書き續け難げなる事どもなれば、唯だ片端ばかりをだにとて有る物摸ねひなるべし。いみじう哀れなりける事は、後に聞きしかば、源少將實基の君は此舞人に爲され給へりけるが、身に物の音してえ舞はざりしかば、良頼の君をさし代へさせ給へりけるに、彼の筑紫に帥の中納言此十二日より俄かにいみじう煩ひ給ひて、「あはれ我が今日死ぬるをも知らで、明日少將は御賀に舞ひかなでんとすらん」と、度度のたまひて、其日の暮に亡せ給ひにけり。親子の契の哀れなること、彼の君の煩はせて、然様にも物し給はましかば如何にいとほしからましと、いみじく哀れにこそ聞き侍りしか。筑紫にはおはせぬ人の御族のおはして悪しかりけると聞き侍りし。

## 後悔大將

斯くて内大臣殿の上、今年二十四ばかりにや、此程に君達五六人ばかりに成り給へるを、また今年も尋常に

もあらで日頃過ぐさせ給へるが、今日明日に成らせ給ひにたれば、例の三條に登任が家に渡らせ給ふ。年頃は小二條にこそは住ませ給へるに、物の兆繁く、人人の夢にも騒がしう、また自らも物心細く思されて、如何にと哀れにのみ思し亂るるに、渡らせ給ふとても、また此處を見んとすらんやと打泣かせ給ふもゆゆし。御前なる人人は恐ろしう思ひ聞えさせたり。殿の人人は更なり、外の人も此御有様を夢などに見つつ聞えさせ給ふ。大納言殿、尼上など静心無く思さるるに、渡らせ給ひぬれば、いとど御修法、御讀經など様様萬づせさせ給ふ。豫てよりも今年來年は斯様なる御有様ならば限りなりとのみ思したるに、頼もしげ無くのみ覺えさせ給ふ。いと恐ろしう思し見奉らせ給へど、十二月の晦日ばかりにいと平かにて男君生れ給ひぬ。御心地なども中中例よりはいと爽やかに、御湯ゆでなどせさせ給へば、誰も今ぞ心のどかに思し見奉らせ給ふ。若君の御乳母は豫てより申ししかば、五節の君、故参河の守方隆が女、衛門の大夫致方が妻ぞ参りたる。御産屋の騒がしき紛れに年も暮れにけり。正月などの事ども思す事無げなるに紛れ給ひ、殿の御歩りきも無かりければ、心のどかに君達の御戴餅など聞きにくきまで祝ひ聞えさせ給ふ。正月六日は七日の夜なれば珍らしげなき御事なれども、年の初めとていみじき頃なれば、いとどめでたし。今日は七日にて御湯殿あるべければ、また夜さりの御湯殿の事どもなど、さまざま喧騒る程に、俄かに打嘔吐ばせ給ひて、御氣色いと苦しげなりければ、いと恐ろしうて、然るべき僧達日頃の御祈りに打怠み心地よげなるに、俄かに斯くおはしませば、皆参り集りて加持参る。殿の内の僧は然るものにて、外の然るべき残り無く召し集めて

加持参りたる際どもも喧騒り満ちたり。すべてあさましう苦しげなる御心地に靜心無き人々多かり。御物怪人人に移しののしる。されどはかばかしき事云はず。辨の定頼の君、大内記義忠など呼び寄せて云ふ事ども有れども、物怪の云ふことなれば誰も其れを眞と思すべきにあらず。貴船のおはするとて、いみじう恐ろしき事ども有れど、然りともし思す程に、年頃此殿には小松の僧都の靈と云ふ事ありて、初めは此御産屋などの折はいと恐ろしかりしかど、其れを萬づに云ひのままにせさせ給ひし程に、いみじき御得意に成りて、其れぞ此年頃何事もいと能く告げ聞えさせつるも、其等も音無きを殿は怪しく覺束なく思召す程に、御湯参らんと有れば持て参りたりけるを聞し召して、やがて物ものたまはせず成らせ給ひぬ。柿浸しの汁を物の葉に附けて参らすれど、すべて御口も塞がせ給ひて筋無ければ、心譽僧都参りて、抑へて加持参り給ふに、暫し有りて御口動かさせ給へば、御湯などつゆばかり参らす。例は然も無きに、御自ら物怪唯だ出で來に出で來れば、いとかたはらいたしと思召して、猶人に驅り移さばやとのたまはすれば、許多の僧心を合せてのしり、加持参りて、他人にも驅り移せど、猶御心地同じやうなれば、集りて加持参る程に、例も憑き慣らひたる女房に小松の僧都現はれて、「此加持止めよ、あなかしこ、あなかしこ、過ちすな、唯だ低聲こそ善からめ」と云へば、殿、「此物怪の斯く云ふは有るやう有らん。此加持止めて經に成れ經に成れ」とのたまはず。斯く云ふは正月五日なり。殿いみじう制せさせ給へば、加持止めて、許多の僧低聲に讀みたり。其程のおどろおどろしさは推し量るべし。心譽僧都も誰も、御物怪の堪へ難げなりつるものを、唯同じ事加持を参

らでと、口惜しう思ふ程に、さこそとののしりしかど、やがて絶え入らせ給ひぬ。あさましくゆゆしなども世の常なり。萬づの物は此二三日の程の御有様に残り無く爲なさせ給へるに、またまたいみじうせさせ給へど、甲斐も無し。然べき僧達皆退かでて、良海内供ばかりぞ留まりて侍ふ。上の御兄弟の内供の君、日頃御枕上にて、はかなき御藥物参らせ給ふ起き臥しも、萬づに仕うまつり給へるなども、すべていとあさましき事なり。尼上つと抱だき奉り給ひて臥させ給へり。御胸がちに乳などもいと張りて、いみじう哀れに見えさせ給ふ。いと怪しう所所赤みなどして憂たてげにおはしますは、世の人の云ふ有様にて亡せさせ給ひぬるにやあらんと、哀れにゆゆしう思すにつけても、殿も大納言殿も、え見奉らせ給はず、いとあさましう際ども差擧げてののしり泣かせ給ふもいみじきに、御匣殿は十一なり、中姫君は九つばかり、唯だ此二所、物の心知らせ給へるさまに云ひ續け泣き給ふ。他君達は走り遊び諍ひなどせさせ給ふ。哀れに心憂し。此日頃斯ばかりいみじかりつるに、ゆめに云ひ置かせ給ふ事無かりつ。大かた物を云はせ奉らぬ御物怪なりけり。あさましう心憂く、いみじき僧都の靈に計られ給ひぬる。されど其れ然べきにもあらずと思すにも、行く方無き御心地どもなり。猶いと覺束なく佗びし。のたまはん事をも聞かん、また神の眞空言をも知らんとて、左近の乳母、泣く泣く御口寄せに出で立つに、尼上も「猶我れも行かん、若し昔の御氣色も見えんに對面せずばいと心憂かるべし」とて、忍びて物し給ふ。年頃睦まじう思召す女房一人添へておはして、尼上には此人人の衣の裾を引き掛けて、おはするやうにも有らずもてなして、巫女をば御車の口の方に載せ

たり。如何なる事にかと心もとなき程に、此巫女唯だ泣きに泣きて、「上こそや、など隠れ給ふぞ」と云ひて、車の後の方に唯だ寄りに寄りて、「哀れ如何がし給はんずる。え仕らまつらで止み侍りぬる事、必ず死ぬべき道理も侍らざりつれど、斯く成りにしかば、哀れに心憂くこそは」など云ひ續け泣かせ給へど、はかばかしき事も無し。左近の乳母には胸をかき開けて、「乳飲まん」とのたまはずれば、乳母と知り給へると見るになん猶あさましきものにこそありけれと、哀れに悲しういみじうて、泣く泣く歸らせ給ふ心も無しや。此物怪の然ばかり在りし折聞えける事など、今ぞ思し合はせて、心憂くあさましう思さる。斯くて二三日ある程に、前の相摸の守たかよしと云ふ人参りて、「夢に見え給ひつる事こそ侍ひつれ。亡き此御有様は人の仕まつりたる事にこそ有べけれ。御帳の御座の下などを御覽せば楊枝にしてなん置きたると見え侍りつるなり。眞に楊枝候はば眞とこそは知らせ給はめ」と申せば、いと睦まじう思召す人人行きて見るに眞に有りけり。然ば夢にも見ゆるものなりけり。あさましう心憂くいみじとも疎かなり。殿と尼上、打語らひ給ひつ、打泣き打泣き過ぐさせ給ふ。殿の、御身の成らんやうも知らず泣き惑はせ給へば、内蔵の命婦参りて、御堂の御消息、上の御消息など萬つに聞え慰むれど、身の有らばこそとのみ思召させ給ふに、御物怪などの事も傳の殿の北の方のしわざと云ひて、貴船の現れてなど申して、今さへ然やうに云ふもかたはらいたく思さるれば、げに此頃ぞ後悔しき大將とも聞えつべし。大納言殿、姫宮の御事をあさましう思し折、本意も遂げなんと思したりしかど、此上の御有様の見る甲斐ありておはしつれば、萬つを思し慰め滞りて、御

匣殿の大人び給はんを見てなど思ししに、斯くあさましう心憂く思し亂るとも疎かなり。斯くてのみやはとて、此月の十四日に御葬送あるべし。いみじながらも只今までは御手水、御臺と準備ぐにつけても、名残ある程には思さるるを、此後いと如何にと思召されて、其日に成りぬれば、早朝より他事あらんやは。其御準備を内にも外にも、有るかぎり思し準備きて、また諸隣に泣かせ給ふ程、道理にいみじや。暮れぬれば殿の御車に御装束。御車の輪などに絹巻きなどするを見るにも、世の常の有様は斯くや有りしなど、いみじき事ども多かり。さて御車寄せたれば、殿、大納言殿、内供の君など、睦まじく思す人々などして、昇き乗せ奉り、率て出で奉る。此度ばかりの事と思召せば、殿の御車に殿人の有る限り、五位十人ばかり付けさせ給ふ。御心の中には、是れ有るまじき事なり、世にやんごとなき事には藏人經たる人をこそすめるに、後の誇り有りなんと思しながら、猶御志、また世におはし長らへ給はましかば、御匣殿、人並並におはしまさましかば、如何にめでたき御有様ならましなど思さるるに、何事も爲残させ給ふべきやうも無し。殿、大納言殿など、えも云はぬ物を着させ給ひて、御車の後に歩ませ給ふ。辨の君も仕まつらんと思しのためへど、御忌の日なるに合せて、またゆゆしう思して止め奉らせ給ふ。出でさせ給ひぬる名残、火を打消ちたるやうに人聲もせぬに、此處彼處哀れにいみじき事どもを云ひ續け泣かせ給ふ。いみじう哀れに悲し。御匣殿、中姫君、太郎君などぞゆゆしき物は奉る。大人は然るものにて、いと小さくて着させ給ふ御有様ども、哀れにいみじう心憂きや。さて夜一夜とかくし明かさ給ひて、曉に歸らせ給ふ。御骨は内供

の君、然るべき人人具して木幡へおはす。殿には待ち奉らせ給ひて、尼上惑はせ給ふ。同じ如響動み泣きたり。哀れにゆゆしかりける正月なりや。朔日に殿いとどやかに御歩りき無くて、君達の御戴餅せさせ給ひて、いみじう御心地よげに、思す事無げなりしを、大納言殿など見奉り興せさせ給ひし程に、何時ぞと思し分かれぬや。世の中ばかりあさましう心憂きものは無かりけり。今初めたる事には有らねど、猶いと珍らかにのみ思さる。御忌の程など、いと哀れに徒然なる事ども多かり。殿の御夢に在りしながらの御様にて、白き御衣あまた着させ給ひて、

ともし火の光はあまた見ゆれども小倉の山をひとり行くかな

とのたまひて、やがて失せ給ひぬと御覽じて、大納言殿にも斯う斯うと聞え給ひて、所所に御燈奉らせ給ふ。はかなく御忌の程過ぎて、二月廿餘日、御法事長谷にてせさせ給ふ。七僧百僧など、其程の御有様、有るべき限りせさせ給ふ。哀れに悲しうて過ぎもて行く。返す返す此御事のあさましさを疎かならず思し惑ふ。御匣殿、御年はいと若けれど、御心深く萬つを思したる程も、いと哀れに、行末推し量られさせ給ひて見えさせ給ふ。其れにつけても、殿はいと疎かならずこそは思ひ聞えさせ給ふめれ。年頃殿の御心の好色しき事の止ませ給はで、宮宮にも物のたまはする人人あり。殿の内にも、はかなく思し付きなどして、上も打解けたる御氣色無く、侍ふ人人も善からぬさまに、はかなく云ひ思ひ過ぎにし、然やうの類ひにも怪しからぬ人人に思ひ云ふべかめれど、其れ有べき事にあらず、猶いと昔も今も、人の心ぞ心憂きものはある

や。御匣殿の御乳母をこそは斯く云ふべかめれ。いと斯く怪しからぬにつけても、物若やかに輕輕しからぬ人は、出でて走りも往ぬべかりし。されど大人に成りにたれば、聞き入れぬさまにて、自ら佛神おはすればと、心のどかに思ひたる氣色も、また押返し然るべき人人は更に有べき事ならず思されたり。唯だとてもかくても亡せ給ひぬる人の御身一つこそ哀れなれ。今は小二條殿に今日明日渡らせ給ふべしとて、物運びなどせさせ給ふ。年頃此家をめでたき所と思して先づ斯かる折渡らせ給へるに、押返しあさましければ「何して」と云ふ事のやうに、つらくあさましう思さる。登任が家にて平かにせさせ給ふとて、殿の御前、加階、御衣など賜はせし程、云へば疎かにめでたかりし事ぞかし。猶萬つに哀れに定め無き世なりや。大納言殿は四條の宮へ渡らせ給ふ。尼上は君達の御有様の心苦しさに、今は御行ひにのみ思せど、いとほしくて添ひて渡らせ給ふ。何れの度の御歩りきには一つ御車に奉らざりし、此度こそと、哀れに悲しうて、また押返し泣かせ給ふもいとみじ。後撰集に有るやうに、

ふるさとに君は如何にと待ち問はば何れの山の雲と答へん

と有る歌光つ此折に思し出でさせ給ふ。殿は其儘に御精進にて、御行にてのみ過くさせ給ふに、安からず氣色だち音つれ聞ゆる人人あまた有れど、只今聞し召し入れず。哀れに月日に添へて戀しくのみ思ひ出で聞えさせ給ふ事限り無し。斯かる程に二月晦日方に、殿の御前、御堂近き邊に御方違におはしまして御殿籠りたるに、人参りて俄かに驚かし奉りて、「御堂に火出で来て候ふ」と申せば、殿の御前、御車にもえ奉り

敢へぬまで物も覺えず惑ひおはしまして御覽すれば、彼の長者の家の心地せさせ給ふ。我れこそ急ぎおはしましぬと思召せど、世の中の人いつの間にか参り集りつらん、御堂の上に數知らず上りたり。水を掛け消ち喧騒る、許多の廣き中に満ちたり。我は唯だ佛の御前におはしまして「助け給へ」と額を著かせ給ふ。許多の僧俗數知らぬ人、御堂にて額を著き、大鐘を撞きて申し喧騒りたり。此方の僧坊の西東と並び造りたるが、其僧坊より火の出で來たるなりけり。許多の人人火を熱しとも思へらず惑へばにや、皆は焼けて、上の御堂の隔ての中門までぞ焼けたれば、許多の人人身の成らんさまも知らず惑ひつればにや、また佛の御願にや、西の風、南の風吹きて、残りにも附かず成りぬれば、僧坊二つぞ焼けける。是れにつけても殿の御有様を殿ばら僧達など疎かならず申し聞え給ふ。佛の御しるし、殿の御前の御心の中の念の程を見せ知らせんと思して、佛神の自ら有らせ給へる事と見えたりなど、いみじう有り難げに世人も申し思ひたりけり。斯くて高松殿の姫君は、六條の故中務の宮の御子の、ます宮と申し、關白殿の上の御弟におはしませば、やがて殿の御子に爲奉らせ給ふ。三位中將にてぞおはする。春宮の大夫、中宮の權大夫、中納言達、いと心得ず怪しき事に思し咽びたれど、殿の御前にせさせ給ふやう有るべし、制し聞え給はん力無ければ、え申させ給はず。今の太貳惟憲が家、土御門なるにて婿どり奉らせ給ふ。其程の御有様推し量るべし。女君快からぬ御氣色なれど、男君其れをも知らず顔にて、遊戯し思いたる様もをか。二月晦日の事なりけり。されど三月にぞ御所露顯ありける。三日に成りぬれば、所所の御節供参り、今めかしき事

ども多く、西王母が桃の花も時節知りたる様なるもをかしくて、所所風流者多く見えたり。斯かる程に、一條院の一品の宮、年頃いみじう道心深くおはしまして、御才などはいみじかりし御筋にておはせませばにや、一切經讀ませ給ひ、法文ども御覽じて、聊か女とも覺えさせ給はぬ御有様なるに、尼にておはしませんも斯ばかりの御行にこそは有らめなど思しながら、猶愛無き事なり、何事に障るべきぞなど思召しけるにや、三月に俄かに尼に成らせ給ひぬ。此宮の中は更なり、大宮、内、春宮まで聞し召して哀れに思召し聞えさせ給ふ。さるは此正月に大宮の京極殿におはしまして、行幸ありしに、宮も其處に渡らせ給ひて御對面ありしに、いみじう哀れに物を思し知るさまの御物語など有りて、今よりは内におはしますべく聞えさせ給ひて、年頃の覺束なさを悔しう思ひ聞えさせ給ふに、斯かる御事を聞し召して、哀れに口惜しう思召す。殿の御前急ぎ参らせ給ひて、萬つ哀れなる事を返す返す聞えさせ給ふ。「故院も斯様にてぞおはしましたんものとぞ思召したりしかし。齡久しとても幾ばく侍るべきわざならず、今は唯だ佛に成らせ給ふべきなり。現世後生めでたくおはします事なり。波斯匿王の女心を發せる、人も教へず髪を削ぎしに、誰かは教へ勧めし、有り難く昔の事覺えたる御心控てなり。世に侍る人は萬つにつけて罪をなん造り侍る。まして子など侍らば、いとこそ物思ひけるわざに侍りけれ。女房達忠實に善く善く仕うまつり給へ」など、哀れに濃かに聞えさせ給ひて出でさせ給ひぬ。帥中納言は「かねて斯くと仰せらるるとも制し申すべきにも侍らぬに、心憂くえ知り侍らで」と、いみじう泣き給ふ。大宮よりも殿よりも、御装束ども奉らせ給ふ。宮より、東宮大

夫殿の中姫君、まだ稚くおはせし折より取り放ち養ひ奉らせ給ひにける程に、今年八つ九つばかりにぞ成らせ給ひにける。此殿の御有様を、いみじう口惜しう心細く思召したり。其れに従ひて大夫殿の歎かしう思すべし。斯くて山の座主院源召して御成受けさせ給はんとて、其御用意あり。御裝飾など本のやうなれば、押返し然るべき様の御具ども、宮司準備ぎ仕うまつる。御帳より初め改めさせ給ふ。一條院萬つにし奉らせ給へりし何の御調度どもも、皆此姫君の御料にと取り納めさせ給ふ。大宮も如何でと思し準備がせ給ふ。道の御事なれば、然様にしておはしませんが、同じ心にて覺東なからず思し聞えさせ給ひける。世に有らまほしき御有様にておはしませば、然るべき人人なども、皆志し參るべき様になん侍る。さるは御年などもまたいと若くおはしけれども、げに同じくはとばかり、行末を兼ねて思召すこと、哀れにめでたくなんとぞ。

鳥の舞

斯くて御堂の東に北南さまにて、西向に十餘間の瓦葺の御堂建てさせ給ひて、年頃造り磨かせ給ひつる御佛、南殿より渡し奉らせ給ふ。萬壽元年三月廿餘日の事なり。やがて其れに御堂供養と思召しけれど、上の御兄弟の大原の入道の君の二月に亡せ給ひにしかば、上の御喪におはしませば、御供養は六月五日に定めさせ給へり。佛の渡らせ給ふ其日に成りて、春の霞の絶間より紫の雲筋絶えず揺曳きけり。日麗かに照り

たる曇り無き辰の刻ばかりに渡し奉らせ給ふ。丈六の七佛、薬師、皆金色におはします。日光、月光皆立ち給へる御姿どもなり。六観音同じく丈六にておはします。佛を見奉れば、獅子の御座より御衣のこぼれ出で給へる程、いみじく艶かしく見えさせ給ふ。渡らせ給ふ程は、力車と云ふものを二つ並べて、一佛をおはしませ給ふ。今日は其車の上に大きな蓮華の座を造らせ給ひておはしませ給ふ。仰げば寶蓋空に有り。此蓮華の座、一一の色に隨ひて千の光明かかやけり。佛此座の上におはしまして、三十二相、八十種好あらたにて、大定智慧の相現じ、威光朝の日の如し。普賢色身無邊にし、六道自在無量にして、體相神徳巍巍たり。烏瑟絲細やかに、慈悲の御眼蓮の如く開けたり。薬の壺銀にて皆持たせ給へり。また六観音、金色の相好圓滿し、三昧月輪相現じ、無數の光明かかやきて、十方界に遍満す。所有の色には普く一切衆生を利益せんと思したり、同じく色色の蓮華を座にせさせ給へり。大悲を初めとして、大梵深遠に至るまで續き居させ給へり。御車に付き仕うまつる者ども、頭に蓮華の冠し、茜の衣を着たり。佛の前後左右には諸僧威儀具足して圍繞し奉れり。諸の寶の香爐には無價の香を焚きて、諸の世尊に供養し奉る。樂の聲、笙、笛、琴、篳篥、琵琶、篋、銅鈸を調べ合せたり。菩薩の姿にて舞ひ續きて、佛の安祥と莊麗しく歩ませ給ふに隨ひて、諸僧、梵音錫杖の聲を唱へて、讚を誦して渡る。空より色色の寶の華降りて、聲聲天の樂を調べ佛の功德を歌詠す。此場に參り會ひたる人人、臆ろげの功德の身と覺ゆ。過ぎにし方も、今、行末も、今日の佛に遇ひ奉らずなりぬる人、前佛後佛の衆生の心地す。いみじう口惜し。彼の法華經の序

品に「及見諸佛、此非小緣、是れ臚ろげの縁にあらず」と見えたり。また過去の阿育王の時に「誰か佛を見奉る者」と有りければ、一人の大臣ありて申しけり。「波斯匿王の妹」と申しければ、召して問はせ給へば、「眞に佛を見奉れり。世に勝れたる者なり。空に昇り給ひて後、七日まで、その御足の跡猶光りき」とこそ申しけれ。今我等有縁の佛を見奉りつ。是れ臚ろげの縁にあらず。是れを縁として極樂淨土に往生して諸の佛を見奉らざらんやと、見佛聞法の縁深き心地して悲しくなん。仰ぎて見れば、法性の空晴れねど、希求の霞増す。樂の聲、大鼓の音、げに六種に大地も浮きぬべし。池に色色の蓮華並み寄りて、風涼しう吹けば、池の浪、苦空無我の聲を唱へ、諸波羅密を説くと聞ゆ。院の中、道俗男女涙を流し、喜び拜み奉る。十方の諸佛菩薩の極樂に参り集まり給へらんも、斯くやと見えたり。模様さまように思ひ湧けど、隨喜の涙一つ色なり。關白殿を初め奉りて、萬づの殿ばらおはします。麗はしく装束きておはしまし並めば、十六の大國の王などのやうに見えさせ給ふ。内大臣殿、按察大納言などぞ参り給はぬも口惜し。今日の行香に四位五位庭に侍ふ。日の光、佛の御光に照り合はせ給へれば、見佛聞法の許多の人人も皆金色に見ゆ。殿の御前、我が御所爲とも覺えさせ給はず、涙は雨と降らせ給へども、空は曇らず。上達部の歡喜の御袖も潮解うしなげなり。東は細藏、宮の女房、西は鐘樓の邊まで、宮宮の女房車ども三つ四つづつ、乗りこぼれ亂れ出でたり。柳、櫻、藤、山吹こき交ぜをかし。是れも其方にをかしくめでたし。佛やうやうおはしまし寄る程に、御階の左右の傍より、童部の鳥の舞したる程、まことに孔雀、鸚鵡、迦陵、頻伽の遊び馴れたると

見えたり。佛の御有様を見奉りて、山の座主「無量百千劫、淨修身口意、如此施故獲得、如此殊妙身」と誦んじて拜み奉り給ふを、大殿の御前を初め奉りて、上達部、殿上人、同じく拜み奉り給へば、院の中に、許多満ちたる人人、身の成らんやうも知らず、「南無」と拜み奉る。口は異なれど、聲は同じく聞えて、涙止め難し。佛の御階を昇らせ給ふ折に、左には山の座主、右には殿の御前立たせ給ひて、御寶蓋を取り奉らせ給ふ。御階の有様、彼の持地菩薩の構へ給へりけん金銀水精の三つの階に劣らず見えたり。佛の南の端より、西向に北さまに並ばせ給へり。事ども果てて、僧ども祿賜はり、樂人被け物賜ひて退かでぬ。此程はいよいよ御堂をめたく磨き建てさせ給ふ。四月に成れば、賀茂の祭とて世騒ぎたるに、また山の座主、山の舍利を女のえ拜み給はぬ事いと口惜しとて、舍利會せんとして、舍利を先づ下し奉り給へれば、世の中の人人参り拜み奉る。祭果てて、四月廿日餘りに舍利會せさせ給ふ。法興院より祇陀林と云ふ寺に渡し奉り給ふ程の有様を、日頃いみじう調へののしりて、小一條院、入道殿などの御棧敷を初め、然るべき殿ばらの御棧敷ども、いといみじく造りののしりたり。先づ其御棧敷の有様ぞいみじき見物なる。其日に成りぬれば、三百餘人の僧の梵音錫杖の音など、いと模様にて、いみじくめでたく装束き調へて、御輿二つを前に立て奉りて、定者左右よりいみじくをかしげにて歩みつつ來たるに、御輿に附きたる者ども、頭には兜と云ふ物して、色色のおどろおどろしいみじき唐錦どもを着て持ち奉れり。樂人、舞人、えも云はぬ菩薩の顔姿にて、左右に分れたる僧達に續きたり。御輿のおはします法興院より、祇陀林までの道の程、いみじき寶の

植木どもを生し並めたるに、空より色色の花降り紛ひたるに、銀黄金の香爐にさまざまの香を焚きて薫じ合せたる程、えも云はずめでたし。祇陀林におはしまして、御前の庭を唯だ彼の極樂淨土の如くに磨き、玉を敷けりと見ゆるに、許多の菩薩舞人どもに、例の童部のえも云はず様様装束して舞ひたり。此樂の菩薩達、金銀瑠璃の笙や、琵琶や、簫の笛、篳篥など吹き合はせたるは、此世の事とゆめに覺えず。唯だ淨土と思ひなされて、えも云はず哀れに尊く悲し。事ども果てぬる際に、被け物、入道殿御棧敷より様様残り無くせさせ給へるに、山の座主の御心掟てもさまざまめでたく、色色にせさせ給へり。此宮宮こそは御覽せず成りぬれば、後に佛舍利ばかりをぞ、内にも宮にも奉りける。先年に山の座主慈惠僧正、母の御爲めにとて、吉田と云ふ所にてぞ同じ事し給ひける。其時は、いみじう世に珍らしき事にぞ思ひて、今の世語にしかるを、是れは彼れに云ふべきことにもあらず。其折の事、今の世の事と同じ口に云ふべきならねば、是ればかりめでたきこと無くなん。斯くて五月にも成りぬれば、例の殿の三十講とて準備がせ給ふ。五月五日童部の薬玉附けたるを御覽じて、内大臣殿の御匣殿、

年ごとのあやめの草に引きかへて涙のかかる我が袂かな

はかなく過ぎて六月にも成りぬれば、廿六日、彼の薬師堂の供養、例の事どもえも云はずめでたし。御堂の有様、例の目も躍きて、如何にも見分き難し。大宮、殿の北の政所おはします御局、此御堂の北に寄りて廂に皆御簾掛けたり。御堂の造りざま、大防のさまなど、西の御堂に異ならず。薬師佛の御前の片方の

母屋の柱には十二大願の心を繪に書かせ給へり。六観音の御前の方の柱には観音品の佛の心を皆書かせ給へり。飯室の阿闍梨の手を盡し給へる程思ひ遣るべし。南より北さまに七佛、薬師並ばせ給へり。端端に日光月光立ち給へり。ひまびまに十二神將身長七尺ばかりにて、色色の衣を着、さまざまの顔、心心の氣色にて、持たる物皆殊異なり。見るに且つは笑ましう、且つは恐ろしげなり。一に見奉りて、隨願薬師經の文を思ひ出で奉る。「一聞我名、惡病除愈、乃至速證、無上菩提」と有り。一度御名を聞きてだに斯かり、況んや七佛を見奉らん程思ひ遣るべし。また七佛薬師經に云はく、「若し我が名を聞く事有らん者、惡趣に墮ちば、佛の神力を以て、また名號を聞かして、却りて人趣に生れて、菩薩の行を修し、速かに圓滿する事を得しめん」と宣へり。況いて見奉る程を思ふに疎かならんやは。また六観音は六道の爲めに思召したり。本誓を思ふにいと哀れなり。「大悲千地獄、大慈正餓鬼、師子馬頭畜、大光面修羅、天人准匠人、大梵如意天」とのたまへり。斯く思ひ續け拜み奉るにも六趣に輪廻する事あらじと頼もしく成りぬ。其中にも、如意輪の御思惟の氣色も哀れに見え給ふ。「難斷煩惱、即能斷除、自然智慧、發起慈心、隨類示現、以大慈悲」また「難度衆生、能度相現、悲哀衆生、慈如一子」などのたまはせたる程、おぼろげならずかし。許多の佛の現れ給へる、且つは何處より來り給へるにか知らまほしきに、無量義經の文に云はく、「戒定慧解知見生、三明六通道品發、慈悲十力無畏起、衆生善業因緣出」と宣へり。殿の御前の御心の中より、現れ給へりと知りぬ。堂莊嚴、佛供など前前の如し。事ども果てぬれば、百餘人の僧達祿賜ひて、樂人ども



例の作法にて退かぬ。御堂供養の有様前前に異ならず。此佛の御後ろ、東の方に眞に戸を立てたり。佛の御後ろには、御格子を短かやかに爲わたり、紫の裾濃の御帳にて、泥して繪書きて、斑紫の御紐したり。いみじう艶かしう見えたり。

駒競べ

はかなく九月に成りぬ。關白殿、高陽院殿にて駒競べさせ給ひて、行幸行啓あるべき御準備あり。いとどしき殿の有様を心殊に掃ひ磨かせ給ふ程、云へば疎かにめでたし。此世には、冷泉院、京極殿などをぞ人面白き所と思ひたるに、此高陽院殿の有様、此世の事と見えぬ。海龍王の家などこそ四季は四方に見ゆれ、此殿は其れに劣らぬ様なり。例の人の家造りなどにも違ひたり。寢殿の北南西東などに皆池は有り。中嶋に釣殿建てさせ給へり。東の對をやがて馬場の觀覽所にさせ給ひて、其前に北南さまに馬場させ給へり。目も遙に面白くめでたきこと、心も及ばず、形容び盡すべくもあらず。をかしう面白しなどは是れを云ふべきなりけりと見ゆ。繪などよりは是れは見所ありて面白し。大宮は京極殿におはしませば、九月四日の夜やがて高陽院殿に渡らせ給ふ。常よりも御輿鮮麗にめでたうて渡らせ給ふ程の儀式有様、御装ひ尋常ならず、常の行啓に勝れたり。女房出車二十輛あり。此殿の草木も恥かしう思されて、斯く爲盡させ給ふな

るべし。日頃雨など降りつれど、今日しも空晴れ月曇り無く耀けるに、女房の服装、袖口、夜目にも著く、云へば疎かにめでたうおはしませぬ。寢殿の南の端のつまに御輿寄せて下りさせ給ひぬ。御供の上達部、殿上人、皆饌など参りて祿なども賜はりて退かで給ひぬ。さて日頃おはしますに、同じ月の十九日駒競べさせ給ふ。日頃だに有りつるを今日は取り分きめでたし。帝のおはしますべき大床子、寢殿の南面に立てて、御座装ひたり。巳の時ばかりにぞ行幸ある。御階に御輿寄せて下りさせ給ふ。さておはしまして居させ給ひて、春宮おはします。陣の外にて事の由奏して、御車陣にてかき下ろして、筵道参りて下りさせ給ふ。西の廊の中の妻戸より入らせ給ひて、西の對の簀子より通りて、渡殿の簀子を渡らせ給ひて、寢殿に南面より入らせ給ひて、御座に著かせ給ひぬ。東宮の御座は平座なり。御簾の内の有様思ひ遣られて笑まし。宮の御前の待ち見奉らせ給ふらん思ひ遣り聞えさせぬ人無し。入道殿は東の對の北の方に寄りて文殿あり、其處に御簾掛けたり。然るべき僧ども多く具しておはします。宮の女房の有様、寢殿の西南面より西の渡殿まで、すべていとおどろおどろしう、紅葉襲色を盡したり。常の事どもなれば云ひ盡さず。西の對には上達部皆著き給ひぬ。然るべく皆饌など聞し召し参りて、やうやう船樂ども漕ぎ出でたり。蘇芳非、駒形など、さまざま舞ひ出で、今は東の對に渡らせ給ふ。また其處にて大床子におはします。少し去りて東宮おはします。平座なり。主人の大臣を初め奉り、上達部、殿上人、皆引き連れて、東の對に参り給ふ。何れの殿ばらも皆御装束めでたき中に、關白殿の御下襲の菊の單衣かがやきて、目留まりたり。競馬十



番なり。生よろしき折のだに乗人も馬もいみじう競みて頼みにやは出づる。馬の心地もいといみじう世にめでたしと思ひて、ともすれば、出でては引き入れ引き入れる程、いといみじう心もとなく見えたり。然てのみ有る程も久しければ「やや」と度度仰せらるれば、出で初めて、度度に成りて、左右互に勝負する程の亂聲の音も、はしたなげなるまでをか。勝負の乗人の被け物の程など、方分きて競みたり。又やがて此殿の舎人ども方人して、東宮の帯刀ども相混りて、馬弓射させ給ふ。勝負の舞などもをかしうて果てぬれば、樂所の物の音ども暗なるままにいみじう面白し。中嶋にぞ樂所はせさせ給ひける。上達部、殿上人なども、いにしへ中頃などの事覚え給ふは、「また上りても斯かる事は見ずなんありし」など、いみじうめで興じ聞え給ふ。事ども果てて夜に入りて還らせ給ふ。御贈物ども御心の及ばせ給ふ限りせさせ給へり。上達部の祿、殿上人の被け物など、世に類ひ無きまでせさせ給へり。家司ども、様様に喜びしたり。二十日の日は昨日の事を戀しう思さるるに、飽かずめでたかりし事を聞えさせ給ふに、上達部参り給へれば、主人の殿、いみじうもてはやし聞えさせ給ひて、大御酒など聞し召して、やがて宮の御方に参らせ給へり。夜更くるまに、月面白く曇り無くて照りわたりたるに、「昨日の事、尋常心地にのみ思ひて、書き留めずば口惜しかるべし、爲政ばかりぞ仕まつらん」と殿仰せ給ひて、御前に召し出でて書かせ給へば、式部少輔文章博士内蔵權頭善滋爲政書き記るし奉る。

大后の宮、天の下に三笠山と戴かれ給ひ、日の本には榊木と立ち榮えおはしましてより、行末頼もしきこ

と、大原の千年を松の風に吹き傳へ、朝夕に喜ばしきこと、有柄川一たび澄める水の心のどけき世に、多くの政をさへ行はせ給ふ左の大 臣も、妹育の山の雲隔たらぬ御中らひなり。ここに百敷の東幾ばくも去らざる程に、古より勝れたる所あるに、新しく花の豊を造り續け、玉の臺を磨き成して、珍奇しき草木を掘り植ゑ、佳所ある處、石を立て並らべて、萬づ世を呼ばふべき山を疊み、四方の海を心に任せ給へる池の水を湛へしめ給へるを御覽せさせ給はんとて、長月の十日四日に特別に渡らせ給へるが故に、我が天皇も昨日行幸せさせ給ひて、ひねもずに御遊び有りて、明くる今日は心のどかに、秋の空も曇り無く、夜はの月かげも隈無く照せり。今あまたの上達部、殿上人参り集ひて、「岸の菊久しく薫る」と云ふことを題にて和歌を奉らせ給ふ。此事を書き記るさん事は爲政なりと仰せ給はす。詞の林も老木となりて、花の匂ひも忘れたり。詞の泉も淺くなり行ければ、人並ならぬ水莖を哀れと思召して、新玉の年立ちかへる春の縣召に洩らされず、數まへさせ給へと申す。

緑なる松の齡をあらそふは江に匂ふ白菊の花

我が宿の岸に匂へる菊の花ひさしき君が影ぞ見えける

落ち積り淵とも成らん岸近み波間に見ゆる菊の白露

岸のおもに波織り掛くる菊の花いと匂ひぞ久しかるべき

をちこちの岸に枯れせぬ菊の花幾世の秋に逢はんとすらん

關白殿 (頼通)

中宮大夫 (齊信)

民部卿 (俊賢)

東宮大夫 (頼宗)

菊の花池のしら波たちかけて世世に流れて匂ふべきかな

いとどしく千代を限りて澄む水に久しく匂ふしら菊の花

匂ふより匂ひを添ふと水底に澄みてぞかゝる白菊の花

しら波の花もろとも岸の菊千とせの秋にほふ宿かな

菊の花匂ふあたりの水の面は千代まで澄まん影ぞ見えける

萬づ代の菊に色添ふ我が君の千年の程を思ひこそやれ

盡きもせず匂へる岸の菊なれば君が千代こそ思ひやらるれ

盡きもせず匂へる岸のしら菊を千年の鶴の居るかと思見る

岸に咲く菊の匂ひを久しとも君が千代にぞ知るべかりける

ゆくすゑに匂はん程は菊の花下の流れを汲みてこそ知れ

池水にほふと見えし菊のはな松の友とも成りにけるかな

流れゆく末の世までに盡きもせずさして匂へる岸のむら菊

中宮權大夫 (能信)

閑院右衛門督 (實成)

皇太后宮大夫 (道方)

權中納言 (長家)

左兵衛督東宮權大夫 (公信)

皇太后宮權大夫 (資平)

右兵衛督 (經通)

左大辨 (定頼)

源宰相 (朝任)

閑院頭中將 (公成)

左頭中將 (顯基)

辨義忠

今宵の上達部の祿、宮の御方よりせさせ給ふ。例の設けの物どもなり。主人の殿御杯勸めて、昨日に盡きにけりとて、上の御方より五重三重の織物の掛、小掛などを奉らせ給ふ。夜更けていみじう酔ひ亂れつづ出で給ひぬ。今日の事のいみじう物の榮無く口惜しかりつるは、内の大臣の参り給はぬ、四條大納言の

参らせ給はぬをなん思召す。殿ばらも同じ心に思し聞え給ふ。大宮は今日明日内裏に入らせ給ふべきを。殿猶暫しと留め奉らせ給へれば、え速速しからず思し滞らせ給ふ。殿の御有様も御覽じ捨てさせ給ひ難げなり。内にも、春宮にも、此事を戀しう思し出でさせ給ふ。御門など例の門にはあらず、櫓を造らせ給へるかじ。此事ども月日に添へていみじうなん。殿の造りざまなどの斯うめでたきにつけても、他事無く、女君達のおはせぬ事をこそは思召すべかめれ。姫君も同じ事に思ひ聞えさせ給へど、いさや、物の隔てある心地のみせさせ思ふも道理になん。月日の過ぐるにつけても此事を思召さるべし。斯かる程に中宮里におはしませば、内より疾く疾く入らせ給ふべき由、御消息度度になりぬれど、年頃多寶の御塔を一尺ばかりに造り磨きたてさせ給ひて、やがて御持佛にと思し掟てさせ給へりける、出で來給へりければ、此供養せさせ給はんとて、その御準備なりけり。女房の服装ども例の事どもなれば、煩たく喧騒る。萬壽元年九月廿三日より始めさせ給ひて、五日の程懺法御讀經なり。僧正は山の座主、さては講師十人を、一方は僧綱、一方は凡僧なり。五日の程思し掟てさせ給へる御心の程いとめでたし。僧どもの法服例の麗はしき様にあらず、夜の御装束どもをぞせさせ給へる。薄鈍の綾の袷五つに、單衣は良き衣をせさせ給へり。上の衣も袈裟などには、僧綱のは羅をせさせ給へり。凡僧には縁をせさせ給へり。帯、扇までも御心ばへあり。包ませ給へる衣笠には、黄金して砂子を巻きためり。包ませ給へる包み紙、香染の羅の包みどもなり。何事もすべて御心に入れ、めでたうせさせ給へりと思し。請僧達の法服は例の事なり。此度の御有様をいと甲斐ある様に申し思へり。女房の服装ども、日に更れり。色色皆紅、菊などなり。御几帳、朽葉の裾濃に秋の繪を書きて、櫛綾の紐をせさせ給へり。土御門殿にてせさせ給ふ。上の御方の女房劣らぬさまなり。其有様、猶いと舊り難くめでたし。内にさへ斯う爲たてさせ給へる折は、心殊に氣高う面白う、出で映する人に似たり。をかしきこと外にも似ず見ゆ。其日に成りて事始まりて、御塔の有様を見れば、かの見寶塔品の涌出の塔も斯くこそはと、めでたう耀き見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨き、透きとほり耀ける程、其時にに遇へる心地す。其中に釋迦、多寶、座を分けて並らばせ給へる程など、二人の如來の光に、御前より初め奉り、見佛開法の人、皆照され奉りたりと見ゆ。色紙の御經に下繪書かせ給へり。表紙の繪に經の中の心ばへを皆書かせ給へり。大進頼常はいみじき細工の、心に入れ、手を盡して仕まつらん程いみじうめでたし。殿の御前、是れを斯く人知れず爲たてさせ給へる程を、返す返すめで奉らせ給ふ。殿ばらもいみじう感じ申させ給ふ。上達部、殿上人、残り無く参り給へり。事ども始まりて、山の座主此御事をいみじう愛で申し給ふ。いとめでたう尊くて、塔の中の二世尊の出だし給ふ所の音聲とも思ひ成され給ふこと限り無し。日頃過ぎもて行くを、如何に寂寥しと思召さる。四日には御遊び有るべし。尋常なるよりはと思召して、かねて樂人どもに召し仰せられたり。おどろおどろしう、憂たては有らで、なつかしうをかしく仕まつるべき仰事を賜はせけり。其日は、殿の御前、斯かる事の結縁し申さねば本意無しとて、此十二人の僧達に、また宿直装束賜はず。其れは此今様の「つやつや」と云ふ衣を、有るか無きかに染めさせ給ひて、綿を

に申し思へり。女房の服装ども、日に更れり。色色皆紅、菊などなり。御几帳、朽葉の裾濃に秋の繪を書きて、櫛綾の紐をせさせ給へり。土御門殿にてせさせ給ふ。上の御方の女房劣らぬさまなり。其有様、猶いと舊り難くめでたし。内にさへ斯う爲たてさせ給へる折は、心殊に氣高う面白う、出で映する人に似たり。をかしきこと外にも似ず見ゆ。其日に成りて事始まりて、御塔の有様を見れば、かの見寶塔品の涌出の塔も斯くこそはと、めでたう耀き見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨き、透きとほり耀ける程、其時にに遇へる心地す。其中に釋迦、多寶、座を分けて並らばせ給へる程など、二人の如來の光に、御前より初め奉り、見佛開法の人、皆照され奉りたりと見ゆ。色紙の御經に下繪書かせ給へり。表紙の繪に經の中の心ばへを皆書かせ給へり。大進頼常はいみじき細工の、心に入れ、手を盡して仕まつらん程いみじうめでたし。殿の御前、是れを斯く人知れず爲たてさせ給へる程を、返す返すめで奉らせ給ふ。殿ばらもいみじう感じ申させ給ふ。上達部、殿上人、残り無く参り給へり。事ども始まりて、山の座主此御事をいみじう愛で申し給ふ。いとめでたう尊くて、塔の中の二世尊の出だし給ふ所の音聲とも思ひ成され給ふこと限り無し。日頃過ぎもて行くを、如何に寂寥しと思召さる。四日には御遊び有るべし。尋常なるよりはと思召して、かねて樂人どもに召し仰せられたり。おどろおどろしう、憂たては有らで、なつかしうをかしく仕まつるべき仰事を賜はせけり。其日は、殿の御前、斯かる事の結縁し申さねば本意無しとて、此十二人の僧達に、また宿直装束賜はず。其れは此今様の「つやつや」と云ふ衣を、有るか無きかに染めさせ給ひて、綿を

いと厚く入れさせ給ひて、三つづつに、裳、袷、袴、野袴など、皆縁をせさせ給へり。扇、塗骨に紫貼りて、然るべき法文を侍従大納言書き給へり。帯には紫の絲をば、唐の組にて添へさせ給へり。やがて我れおはしまして、配らせ給ふとて、「斯くやんごとなき折の御事に、斯かる老僧の言添へ申すは、なかなか事損ふやうなれど、唯だ此法華經に結縁の志の深くてなん。此衣どもは、風病の重さに、なまけなく爲集めて侍るを分ち奉るなり」とのたまはせて、配らせ給へば、僧達いみじう畏まりて申し給ふ。「年頃公私の然るべき折参り仕らまつる中に、此度の御布施のやうにめでたき事はなん、又見給へざりつる。年頃の風病ことわり申して罷り去りぬめり」と申し給ふ。「其中にも、其中にも此帯こそいみじきものにて侍るめれ」など、口口甲斐ありて申し給ふ。斯くて其御遊びいみじう面白くて果てぬれば、祿ども賜はりて、日暮れぬれば、殿ばら、御前の簀子にて遊ばせ給ふ。有りつるだにをかしかりつるに、況いて人に由り殊異なりと云ふやうに、心殊にいみじう面白きに、此僧達は聲打擧げ物誦んじたれば、極樂の菩薩達も斯くやと思ひやられて、めでたきこと限り無し。若き僧達に然るべき君達の打添へ給ひける聲どもぞ、誠に尊くめでたき。其日も暮れぬれば、明日ばかりと口惜し。又の日朝座夕座果てて、僧達例の有様の事どもにて退かぬ。内よりは今は御準備も果てぬらんとて、疾く疾くと頻りに御文参れど、此事に由り、衣更への事どもまだ爲させ給はざりつれば、押返し準備がせ給ふ。大宮はやがて高陽院より入らせ給ひしかば、少し心のどかに思召して準備がせ給ふ。十月十七八日の程にぞ入らせ給ふ。月立ちては、また五節の程の女房の服装ども準備が

せ給ふ。此程に殿の御前長谷寺に参らせ給ひて、七日籠らせ給ふ。國の守も煩はさじと思召して、京より萬つ具せさせ給ふ。七日が中にやがて萬燈會せさせ給ふべければ、油、燈心まで持て登らせ給ふ。佛の御帳、何くれ、佛の御具ども、いみじう事調へ持て参らせ給ふ。御誦經、御修法などいみじうせさせ給ひて、山の僧具せさせ給ひて、出でさせ給ふとて、寺の別當、所司どもに、模様品品に従ひて被け物疋絹賜はす。萬つを準備がせ給ひし甲斐無く、其日より、宮宮、内、東宮、院よりなどの御使頻りに續き参り集りたるに、御迎の人人いと多う参りたれば、本意無しと思しむづかりて出でさせ給ふ。御心の中に、何事も驗有り、嬉しく思召さるる事多かるべし。斯くて師走の廿九日は、内の大い殿の上の御果て、法興院にてせさせ給ふ。此度ばかりと思召したる御有様思ひ遣るべし。斯くて御衣の色更る折に、内の大い殿の御匣殿、今はとてかたみの衣脱ぎ更へて色かはるべき心地こそせねとのたまはする。大い殿も、大納言殿も、いみじう泣かせ給ふ。道理なりや。

## 若枝

はかなくて萬壽二年正月に成りぬ。空の氣色も引き代へ心のどかなるに、枇杷殿には今年大鬘せさせ給はんとて準備がせ給ふ。女房達何わざをせんと云ひ思ひたれど、此度の事には物狂はしく、様悪しきこと無く

て、唯だ麗はしうとのたまはするに、正月二日臨時客とて、其日、女房敷を盡して色を着たり。御几帳皆朽木形なるに、翠簾いみじう青やかなるも、木の芽春は埋木も無きにやと見ゆ。はかなく、正月七日も過ぎぬれば、關白殿の大饗は二十日なるべし。此宮のは廿三日と定めさせ給ひて、我も我も劣らじ負けじと準備ぎ喧騒りたり。關白殿年頃御子と云ふもの持たせ給はぬ歎きを、入道殿、上思召したるに、故式部卿の宮の御子の右兵衛督は、關白殿の上の御伯父の子にこそはおはしけれ。其君、人に女しきさまにぞ覺え給へりし。有國の宰相の女の腹に女君二人生まれ給へりしを、母も亡せ給ひければ、父君は年頃とかくし歩りき給ひて、其れも亡せ給ひにしかば、其女君達、今はむげに大人に成り給ひて、いとほしげにて在りと聞かせ給ひて、關白殿の上、知らぬ人かはとて迎へさせ給ひて、殿の御まかなひ、御髪参りなどに、二所ながら侍はせ給ふ程に、姉君は致仕の大納言の御子の則理を語らひたりける程に、尾張の守に成りにければ尾張へ往にけり。弟の君はわざと名も附けさせ給はで唯だ住み給ふままに、對の君とぞ召しける。此君に殿自ら睦まじく成らせ給ひにけり。御志の有るさまに目覺ましき事ども有りければ、上、他人よりは、然やはなど、目覺ましげなる御氣色など、かたはらいたくて、やうやう里がちに成り行けば、然るべきにや有りけん、他事は上の御氣色に隨ひ聞えさせ給ふに、此事ばかりは其れに障らぬさまに、ともすれば、御歩りきの次でも立寄り給ふ。晝などもかき紛れおはします程に、尋常にもあらず成り給ひにけるを、世の人いじめでたき幸ひ人に云ひ思ひけり。此頃ぞ子生むべかりければ、關白殿、然るべき事など思し掟てさせ給ひ

ける程に、男君生れ給ひぬべしと云ひ喧騒れば、殿はかたはらいたくて、御自らは得おはしませねど、覺東なさの御使頻りなりけり。斯かる程に、いと平かに男君ぞ生れ給へりける。殿聞し召すに、あさましきまで思されて、御劍など遣はす程ぞめでたきや。大殿も嬉しき事に思召して、七日だに過ぎなば大殿の北の政所迎へさせ給ひて、其處にて養ひ奉らせ給ふべく思召しける。産屋の程の事どもは、然るべき國の守どもに仰せられて、皆其處より爲ののしりたり。然ば世に斯かる幸ひ人も有りけりと喧騒るも、げにと見えたり。入道殿より斯くのたまはせたり。

年を経て待ちつる松の若枝にも嬉しく逢へる春のみどり子

御返し聞えず、覺東なし。御乳母我も我もと望む人ありけれど、故伊賀守橋資成と云ひし人の女、遠江守忠重が女、紀伊前司成章が女ぞ只今は参りたる。殿はおはしまして御覽じければ、限り無く思されけり。殿の上は、宮宮の刀自、をさ女にても、此御子をだに生みたらば、我が在る折に疾く見んなど思しのためひければ、是れは況して卑しからぬ人なれば、斯く思召すさまなりかし。斯くて枇杷殿の宮には、二十二日の夜さり、二十三日の曉などにぞ里の人人参り混む。二十二日に寢殿の東の對などの御装束、關白殿の大饗に殊に異なるべきには有らねど、御引出物の程異なる。また上達部初めは東の對に著かせ給ひて、後は御前の南面の簀子にこそはおはすべければ、然様の事ばかりこそ異なるべけれ。其日に成りぬれば、日頃いつしかと待ち思ひたりつる若き人人は、また人の衣の色匂ひにや劣らん勝らんの競み、胸騒がしかるべし。局して侍ひ



著きたる人人は、局ながら萬づを爲準備きたるに、里の残りの人人は参りて、臺盤所にて、はかなく屏風几帳ばかりを引きつぼねつつ、隙も無く居たり。また各の得意どもは、其局局に往きつつぞ居たりける。局にはまた物縫ひ騒ぎて、「あないみじや、頭をだにこそ修飾はね」など云ふ者あり。また爲果てたるは齒黒め附けなど、心のどかに我身の化粧を爲磨くも有り。扇なども賜はせたらんは、籠相にぞ有らんかしなど思ひて、然るべき人人に云りつけ、我が繪師に書かせなどしたる人は、其心もとながりをし、或るは御んのは如何がし給へる、まろが物の思ふ様ならぬ、打物の艶定め、織物の紋を持て騒ぐに、色許されなどしたる人は爲たり顔に思ひて押退けたる様なり。然らぬが是れをももどかしげに思ひて、心の限りは劣るべき事かは、唐衣とすれども、斯くすれども、無紋にて在るは、堅紋も猶物けさやかに浮ばぬ歎きを爲たり。明けぬれば、所所の御格子上げ、妻戸押明け、半菰明け開きて、或るは髪をつくろひ、顔を磨きなど騒ぎたり。また見れば、いみじう大きな袋包みなど持て騒ぎ、取り入れさまよふ。また見れば、長持辛櫃の蓋に、いとおどろおどろしう疊み入れて、打重ねて、二人など昇きて持て来る者あり。一人が幾つを着るべきにか有らんと、見る人人噂みたり。やうやう日射し出づれば、わざとならずをかきさまにて、食ひ物ども里より持て来て食ふも有り。また其れに目を見やらず、扇を買き、薫香を焚くも有り。局の人人「あないみじや、氣上げさせ給ふな。此日頃物騒がしう思召して、物も聞し召さず、今朝だに猶御湯漬にても唯だ少し聞し召せ。許多の御衣どもは、如何が擽げさせ給はんずる。御覽せずやはありし。昨日上の御前の取り重ねて、左衛門

に着させ給ひて御覽せし程に、左衛門え動かで、すくみて立ちて侍りしは「など云ふも聞き入れず、心一つを騒ぎ立ちたり。斯かる程に、日やうやう辰の刻ばかりに成れば、上より此人人遅く参り給ふと有る仰言、侍ひの人人、或るは刀自、水仕女など一一に云ひ渡す。されど例の事ぞとて、我身どもの事を、返す返す磨き居たり。餘り日高り成りぬと、仰言度度に成りぬれば、参り集る朝廷人、やがて几帳差し、また行き道掃ひなどして参る程、衣の裾など取らせて参るを見れば、扇もえ差し隠さず、衣の煩たく厚ければ、嬌やかなる氣も無し。唐衣はやがて着つるままに綻びて出でぬれば、理由無くて好むと無けれど、斑紫の絲して掛けためる。斯くて参り混み集る程を見るに、御前の方思ひ遣り参らせ、奥ゆかしげなり。さて参り混みぬれば、寢殿の御階の間に、御几帳置はしく立てさせ給ひて、其西の間より、渡殿より、また西の對、東南面まで、一間に二人づつ居たり。御階の東の方より東さまに折れて、水の上の渡殿まで居たり。數は知らず推し量るべし。御簾は斑紫の絲して編みたり。縁など例の様ならず、心殊に目留まりてさせ給へり。斯様にて並み居たる人の有様、云はん方無うおどろおどろし。未の刻ばかりに、上達部参り集り給ふ。大かたの空は晴れたれど、雪打散りていみじうをかしう見えたるに、御前の砂子えも云はず面白きに、遣水などの音もをかき程に流れたるに、殿ばらなどの参り給ふ。然るべき御隨身などの、いみじう調和しき様して、中門の程に弓杖つきて居た。程など、唯だ繪に書きたると見ゆ。關白殿参らせ給ふさま、御隨身おどろおどろしうめでたしと見へ程に、小野の宮の大臣の参り給ふを見れば、御年の程よりはいみじく若く見え給



ひて、猶いと顔細かに愛敬つき給へる様なり。人よりは殊になつかしう見え給ふ。大將兼け給へれば、其御隨身も華やかに爲たて給へり。誰も先づ東の對の母屋に西向に著き給へり。殿上人は南の廂に著きたり。母屋は南を上にし、廂は西を上にしたたり。事ども調ほりぬる程に、皆例の作法にて、御前の方に西の對まで見渡し給ふに、更にも云はず、衣の褻重なりて打出だしたるは、色色の錦を枕草子に造りて打着たらんやうなり。重なりたる程、一尺餘ばかりに見えたり。あさましうおどろおどろしう、袖口は圓み出でたる程、火桶の小やかならんを据ゑたらんと見えたり。萬づあさましうも耻かしうも、許多の人如何に見るらんと、すずろはしうて面赤み給ふべし。拜禮果てて、左大臣にて關白殿只今おはしませば、其れを先として、いと麗はしう寛舒に歩みて、寢殿の東面の御階より上り給ひて、南の階の東面を一の座にて關白殿、次に小野の宮の右の大臣著き給ひぬ。次に中宮大夫など、さし續き並み居させ給ひぬ。皆御茵に居給ひて、北向に居させ給へれば、御下襲の後どもは高欄に打掛けつつ居させ給へり。攝練襲、柳、櫻、葡萄染、若うおはする殿ばらは、紅梅の濃き淡き織物などにて着給へり。色色に見え耀き照り渡りたる程いみじうをかし。おはしまし居て、此御簾際を誰も御覽じ渡せば、此女房の服裝どもは、柳、櫻、山吹、紅梅、蕪葱の五色を取り交しつつ、一人に三色づつを着させ給へるなりけり。一人は一色を五つ、三色着たるは十五づつ、或るは六つづつ七つづつ、多く着たるは十八二十までぞ有りける。この色色を着交しつつ並み居たるなりけり。或るは唐綾どもを着たるも有り、或るは織物の堅紵、浮紋など色色に従ひつつぞ着ためる。上着は五重などに

爲たり。或るは柳などの一重は皆打ちたるも有めり。唐衣どもの色、皆また此同じ色どもを取り交しつつ着たり。裳は皆地摺大海なり。御几帳ども、紅梅、蕪葱、櫻などの裾濃にて皆繪書きたり。紐ども青くて纏けり。殿ばらあさましう目も彩にて、互に御目を見交して憫れ給へり。今日も四條大納言、内の大臣參らせ給はず。故上の御忌月なりければ、内の大臣はむげに參らざらんは覺束なくゆかして、御直衣にて内に參らせ給ひて、女房の中に混らせ給ひて、衣の裾、袖口つくるはせ給ふ。髪掻き撫でなどせさせ給ふを、女房、なかなかいと佗びしう、「身より汗あゆ」などは是れをや云ふらんと佗びしう覺えて、面赤む心地すれども、身は冷えたり。大方の有様は御前の御覽するを、耻かしう如何に如何にと、人の容貌、振舞より初め衣の有様、匂ひなどを御覽ずらんと、佗しく各思ひつつ、此並み居て見給ふ人人の目は扇に紛らしても、さばれ誰とも知られ奉らねば、御靈會の細男の手拭して顔隠したる心地するに、此内の大臣の微笑み紛れさせ給ふぞ、いみじう佗びしき事なりける。此殿ばらの御香り、匂ひ、さまざまめでたく吹き入れらるるに、また内には梅花をえも云はず焚き出で給ふ。今日の侍従は左右大臣にも勝りぬべくなん人人思されける。御前には、東の廊の前の方に、やや西に出でて、樂人どもも侍ふ。御前の火焚屋の下の梅の、人繋き氣はひの風に散りくる香りもめでたし。例の作法の舞人四人づつ出で来て、萬歳樂、太平樂など舞ふ程、いみじう面白し。樂の音なども折からにや優れてめでたう聞えたり。樂人ども御前の方の御簾ぎはを打目守り揚ぐる心地も、興ありて、物の音いと面白し。小野の宮の大臣、關白殿に差し寄り聞え給ひて、「面白き事ども、め

でたき事ども、年經める人は自ら見るものなり。未だ今日の女房の服装のやうなる事こそ見侍らね。唯だ斯かる事はあさましう怪しからずぞありける」など申し給へば、關白殿打微笑ませ給ふ程も、御簾の内には何事ならんと、漫ろはしう思ふべし。「一日關白殿の大鑿をぞ殿の有様より初め、えも云はずめでたしと思ひしに、彼れは闇の夜なりけり、今日は明かなる鏡に差向ひたる心地してこそは我が耻かしければ、然様にこそは覺え侍れ。男の所は女房遠にて、いと心安しかし。先づ今日は萬づの事の餘りいたう用意はるるに、いと佗びしや」などのたまふも、いと様様をかし。まことや、辨の乳母の姪こそは今日やがて大人に成させ給へば、殿ばらなど参り集り給ひぬれば、先づ宮の御兄人の中宮權大夫殿は、大經所の方より入らせ給ひて、裳の腰結はせ給ひけり。御杯ども度度に成りて、殿ばらの御物耻も少し忍び難げなり。日の暮るる程に所所の柱松どもに、また手毎に點したる光どもなどの晝と見ゆるに、また女官どもの爲たり顔に、怪しの服装ども側め立てて、物慎ましげも思ひたため氣色にて御殿油手毎に参り渡す程なども、然る方にをかしう、惡所などに斯かる者出で來なんやと見ゆるに、衛士の何ぞやを狩衣の摸似にして着て、何でふ事か侍るめると思ひたる氣色して、入り居て、快う焚き居たる程、いみじう氣高う目留まりて御覽す。殿ばら今は御遊に成りて、いみじうをかしきに、夜に入りたり。物の音ども心殊なり。御杯に花か雪かの散り入りたるに、中宮大夫打誦んじ給ふ。「梅花帶雪飛琴上。柳色和煙入酒中。」また誰れぞの御聲にて、御杯の繁ければ、「一盞寒燈雲外夜。數盞溫酎雪中春」など、御聲どもをかしうてのたまふに、一何か、

今日は萬歳千秋をぞ云ふべき」などのたまふも有り。様様をかく亂れ給ふ。やや堪へ難げに御氣色ども見ゆるもおはすべければ、心苦しうて、御祿ども取り出でさせ給ふ。暗ければ見えねど、いみじうさせ給へりとぞ聞き侍りし。殿ばら出でののしらせ給ふ。さて關白殿内に入らせ給ひて、御前に申させ給ふ。「今日の事、すべていと事の外に怪しからずさせ給へり。此年頃、世の中いと斯ういみじう成りにて侍る。また一年の御堂の會の御方方の女房の服装どもなどぞ世に珍らかなる事どもに侍りしかど、其れは夏なれば事限り有りて筋無かりけり。何でう人の衣か、二十着たるやう侍ふ。更に更にいと怪しからずおはします小野の宮の大い、中宮大夫など、いと耻かしき上達部も、すべて斯かる事をなん聞き見ざりつるとぞ申されつる。其れは然るものにて、見目のおどろおどろしう燦かなる事はまた世に珍らかに候ひつるわざかな」と、返す返す同じ事をさせ給ふ程の御氣はひ、氣近う愛敬つき耻かしうおはします。今日の一の上とも覺えさせ給はずなん。「今御堂に今日の事ども問はせ給はば、此女房の衣の數に由り、御勘當侍らんずらんと思ひ給ふこそいと苦しう候へ。宮宮に善き事候へば打笑ませ給ひて、いと善しと思召したり。斯様に例ならぬ事候へば、先づ追ひ立てさせ給ふに、いと輕輕に候ふなり。大宮、中宮は、女房の服装、衣の數六つに過ぐさせ給はねばいと善し。此御前なんいと憂たておはしますとこそ常に候ふめれ」など申し置かせ給ひて、出でさせ給ふ。女房達居竝みて、立つ心地いと佗びし。各然るべきには陣に車率て騒ぎ、然らぬは、局局に皆行きで物も覺えで寄り臥しぬ。斯くて其夜も更けぬれば、又の日御堂より、關白殿疾く参らせ給へと有れば、

何事にかとて急ぎ参らせ給へれば、世間の御物語なりけり。除目今日明日に成りぬれば、然様の事どもなるべし。「斯うて如何にぞや、昨日の宮の大變如何が有りし」と問ひ聞えさせ給へば、侍りしやう、然か然かと一に申させ給へば、いと快う打笑ませ給ひて、「さてさて」と問ひ聞えさせ給ひて、女房の服装など問ひ掛らせ給ひて、有りし事ども聞えさせ給へば、いみじう腹立たせ給ひて、「あさましう珍らかなる事どもなりや。衣は七つ八つをだに安からぬ事と思へば、中宮、大宮などには皆申し知らせて、いみじき折節にも唯だ六つと定め申したるを、過またせ給はぬに、此宮こそ事破りにおはしませ。すべてすべて、更に更に承らじ」と、過ぎにたる事をのしらせ給ふも、さすがにをかしく思さる。「然るにても、大臣は斯うやは在すかるべき。朝廷の御後見は如何なる人のするわざぞ。何でう然る事を見て、唯だに在る人か有る」など、いとおどろおどろしう、むづがらせ給ふ。いと理無き勘當なりとぞ申し給ふ。返す返す珍らかなりし日の有様とぞ、東宮、中宮權大夫殿達など参らせ給ひても申させ給ふ。斯くて、あさましき事は、此廿五日の夜、四條の宮は焼けぬ。然るは尼上など今は彼の宮にこそ住ませ給へば、いみじき事なりや。大納言殿思し立つ事も有るに、いとをしきわざかなと思して、又の日より、先づ對一つを急ぎ合はせ給ひてせさせ給ふ。斯くて關白殿の若君、此月廿八日に大殿に渡らせ給ふ。其夜の有様思ひやるべし。いとわざと誠に事事しう持てなさせ給へり。大殿や上など土御門殿に待ち迎へ、いみじく愛くしみ奉らせ給ふ。ともかくも云ふべきにあらず。唯だ大臣の幼なかりし折に違はずとぞ愛くしませ給ふ。關白殿「今はいと心安し。斯く参らせつ

れば知り候はず」とて、退かり出でさせ給ふ。殿の官旨、御乳母の數に入れさせ給ひつ。先づ暫し御湯殿などは官旨して参らせ給ふ。いといみじうめでたし。彼の母君は、其儘にまた尋常ならず煩ひてなん物し給ふとか。其れも大殿よりぞ訪らはせ給ふ。目覺ましきまでめでたくなん。大宮土御門殿におはしませば、常に迎へ奉らせ給ひて、抱だき愛くしませ給ふ。内の大い殿は母無き子どもを數多持て扱ふをば、「親は一入召すべかりける」など興無げにこそ思しのためはすと人語り侍りしか。そは然る事にやとぞ。二月朔日に成りぬれば、粟田殿の二位の宰相をば、此頃左衛門督とぞ聞ゆめる。其姫君に三條院の中務の宮増どり奉らせ給ひつ。御識り無き御中らひにぞ人聞ゆめる。いとほしき事は、皇后宮去年より惱ませ給ひて、ともすれば限り限りと見えさせ給ふぞいみじき。其れにつけても、唯だ此姫宮の御事を思召すに、安くも思召されぬなるべし。内の大臣こそ然様に思し聞えさせ給ふめれど、いと憤ましうのみ思されながら、殿も、今年春は過ぐしてやなど思さるるに、此宮の斯く今や今やとのみ見ゆる御有様なれば、如何でかはとぞ。三月十餘日に、大宮の御八講あるべしとて、女房もいみじう準備ぎ、世の中にも御捧物準備ぎのしるめり。院は宮の御惱をいみじう思し歎かせ給ふ。此院の女御殿もいと苦しげにせさせ給ひつ、月日に添へて影のやうにのみ成らせ給へば、方如何にとのみいみじう思し歎かせ給ふ。入道殿よりも、斯くおはしませば御修法、御讀經なども隙無く思し掎てさせ給ふ。堀河の大臣、女御やなど引き連れて、いとおどろおどろしき御氣はひ有様にののしり給へば、いとほしう、かたはらいたうのみ思召す。斯う云ふ程に、一二の宮も成

長させ給ひるにつけても、物のみ哀れに思召すべし。世の中に天變など類りにて、人の物云ひも憂たて恐ろしければ、然るべきやんことなき邊の御愼みどもの繁きにも、尙侍の殿の尋常にもおはしませねば、如何に如何にと、いみじき事どもをぞ爲させ給ひける。關白殿の若君は、然もこそ有らめ、御容貌さへ斯く珍らかにおはしませば、愛護き聞えさせ給ふ甲斐ありてなん。

## 嶺の月

斯くて皇后宮の御憫、去年よりは頼み少なく成らせ給へば、所を更へて試みさせ給ふべく人人申せば、然はとて大藏卿の家へ渡らせ給ひぬ。さておはしましたれど、同じ事にのみおはします。院より初め、宮宮も、いみじき御祈り始めさせ給へど、同じやうにのみおはしまして、限り限りとのみ見えさせ給ふに、宮の官はするは、「早や忘れて止みぬべかりつるものを、此姫宮の御有様見果てでは、え行きやらぬ事」と歎かせ給ふ。御前に侍ふ人人、宮宮の御涙止め難きに、姫宮の況いて寒き敢へさせ給はぬ程、哀れにいみじく見えさせ給ふ。院、「いと斯くな思召して、世の中に侍らん限りは、誰を誰れと思ひ侍るべき身ならばこそ」など聞えさせ給ひて、御直衣の袖も潮解げにおはしませば、宮の御前「さこそは頼もしく思ひ聞えさすれど、猶心苦しうなん。さばれ、今は斯くも思ひ聞えさせじ、罪いみじからん」など、いと弱げなる御氣色に、萬づ

いと哀れに悲しう心細く覺えさせ給ふべし。四の宮斯くておはしませば、仁和寺の僧正いと後ろめたく思ひ聞えさせ給ひて、夜晝分かぬ御使あり。何事もすべて残ること無けれど、終に三月晦日に花と共に別れさせ給ひぬ。いみじく悲しとは聞えさするも疎かなり。宮の内の有様思ひやるべし。むげに大人におはします院などだに、いみじう思召す。況して姫宮は思召し入りたる、道理に見えさせ給ふ。御年なども只今はいと斯くおはしますべきにもあらざりつるに、あさましく口惜しう心憂くのみ、誰も思し惑はせ給ふ。御乳母の式部の官旨、八十ばかりにて、萬づに哀れなる者に思召し育ませ給ひつるに、後れ奉りたる程、云へば疎かにいみじきに、何事も無くて唯だ消えに消え入りて、物も覺えねば、息子の衛門の大夫致方來て、萬づに慰め、湯飲ませなどすれど、嘔吐しつゝ惑ふ。道理にいみじくなん。月立たば祭など云ひて、煩かしかるべければ、如何になど思召して、月初三四日の程にぞ雲林院の西の院と云ふ所におはしませ給ふ。やがて其夜、入棺と云ふ事させ給ふに、他人参り寄るべきにあらず。宮宮、入道の君、大藏卿など侍ひ給ひて、萬づに仕うまつり給ふ。哀れにめでたし。入道の君、御身に尊き事ども書き集めさせ給ふ。此度の御渡りは例の御有様なれば、院も姫宮も京は御車にて仕うまつらせ給ふ。故院の御時、心寄せ仕うまつりし人人、また今の院の殿上人など、いと數多仕うまつれり。いとおどろおどろしき御装ひなり。さて西の院にぞおはしませせて、御車ながらかき下ろして、おはしませ給ふ。四月十四日にぞ歎め奉らせ給ふに、御遺言にや、世の常のさまにておはしませ給ふまじきなめり。皆西の院にぞ式部卿の宮などもおはします。姫宮も留まら

せ給ふべきにもあらねば、忍びて渡し奉らせ給ふ。院もやがて斯くておはします。然るは女御殿の御儀も如何がとのみ見えさせ給へど、如何でかは出でさせ給はん。此宮も去年より斯く惱ませ給ひつるが、斯くおはしますにつけても、いとど如何に如何にとのみ思し亂れさせ給ふ。西の院には其日に成りぬれば、然るべき御有様、日一日準備がせ給ふ。西の院の戌亥の方に築土築き籠めて、檜皮葺の屋、いとをかしげに造らせ給ひて、其處に納め奉らせ給ふべきなりけり。院などの一夜も今宵も歩ませ給ふなど、疎かならず見えさせ給ふ。御念佛の僧など數知らず多かる中にも、四の宮の御方より奈良、仁和寺などより参り混む、哀れなる御氣はひも遠からぬ程を、齋院に御耳留められて、頓みに御殿籠らず、萬づ思し知らせ給ふ。此邊に多くの人満ちたり。さて其屋に御裝飾をいみじくさせ給ひて、やがて御車ながらかき据えておはしませ給ふ。御殿油明く掲げて聞し召し物など参り据ゑたり。萬づ斯くと今は見奉らせ給ひて、宮宮、院など萬づを宣はせつづ泣かせ給ふさまなど、いといみじう、云ふにも疎かなり。さて人人夜明けぬべしなど申せば、出でさせ給ひて、おはします屋の妻戸打固むる程、さし退きたる人人の心地だにいとみじう哀れに悲しきに、況いて道理にいみじう見えさせ給ふ。雲烟と成らせ給はんは、あさましながらも云ふ方無くて止ませ給ふを、是れは哀に云はん方無し。女房達など此度ばかりこそ御供に参らめと、皆慕ひ聞えさせて参りつれど、いと遙かに見やり参らせて、退きてなん車ども引き立てたるに、おはします屋の戸閉づる音に、在る限り聲を合せて、云ひ知らぬ音なひどもなり。月いと明くて、御供の法師、俗の人は限り有れば何事も思ひたらで、急ぎ

歸る有様、祭の歸さなどの心地して、物騒がしく見ゆ。やがて其夜三條院に歸らせ給ひて、西の廊、渡殿などの板敷下ろして、院、宮宮おはしますべき方分ちたれば、皆入らせ給ひぬ。ゆゆしげなる御裝飾の有様なり。姫宮は有るか無きかの御氣色にて明かさ給ふ。又の日の二日ばかり有りて、宮の内侍、命婦など云ふ人の許に、如何なる心地して歸りけんなど問ひたる御返事に、

思ひ遣れ胸やは明くる音高み雲の夜殿の戸を閉ぢしより

とぞ云ひやりける。雲霞と成らせ給ふも、げにいみじき事なれど、是れは様異りて、いみじき事の様なり。

姫宮は月日の過ぐるまに、有るか無きかに思召させ給ふに、人人、女房の中には、自ら程程れば、をか

しき事も有り。此相任法師の君の所より、中納言の君に、

煙せぬ深山送りの悲しさに雲の林は立ちや添ひけん

と有れば、

有りとしてや人は間ふらん送り置きし雲の夜殿に添ひにしものを  
とぞ有りける。道理にぞ有りける。さて後後も、宮宮、西の院におはします。七日七日の御事ども、様様いみじくさせ給ふ。御念佛果てまで有るべく、此西の院の僧達に、仰言賜はす。是れは彼のおはします周囲に参りつつ仕うまつるべきなり。御法事の御經は院の御手づから書かせ給ふ。御佛は式部卿の宮、其れは自ら思し控てさせ給ふ事も有るべし。帥中納言、左衛門督の御方にて、皆計らひ給へり。斯くて御法

事、又の月の十餘日にせさせ給ふ。中宮は七僧の法服ほふくはしくせさせ給へり。三條の宮にてせさせ給ふ。其程の御有様思ひ遣るべし。御願文ごねんぶん、大内記おほのうちに菅原忠貞すけはらのただただそ仕うまつりたりける。此おはします御有様を仕うまつりたるが、いみじく哀れなりけり。唯だ片端かたはしを形容かたはしびたり。「黄金こがねの車ながら寄せて、玉の扉たまごを閉ぢてより以來このた、供奉くわんぶするや何者ぞ、獨り嶺の月の曉あけつぎの影、啓けいせんするや誰の人ぞ、唯だ林の鳥の夕ゆふべの聲」など、いみじく哀れなり。斯くて御誦經みよきやうなど、さまざまにて果てぬ。今日の御願文ごねんぶんを或人聞きて詠みける。誰と知らず。

月のかげ林の鳥の聲ならで行き問ふ人の無きぞ悲しき

宮宮の御服ごふくも哀れにぞ。斯かる程に、山の井には、女御殿の御惱ごなう、月日に添へていみじければにや、影のやうに成らせ給ひにたり。院萬つに思し歎かせ給ふ。此頃聞けば、逢坂あさかの彼方あなたに關寺せまらと云ふ所に、牛佛うしぼたけ現れ給ひて、萬つの人参り混み、見奉る。年頃此寺に大きな御堂建てて、彌勒みらくを造り据え奉りける。桶かや、えも云はぬ大木どもを、唯だ此牛一つして、運び上ぐる事をしけり。哀れなる牛とのみ御寺の聖思ひじりひ居たりける程に、寺の邊あたに住む人、借りて明日使はんとて置きたりける夜の夢に、「我は迦葉佛かせつぶつなり、此寺の佛を造り、堂を建てさせんとて、年頃するにこそ有れ、尋常ただの人は如何でか使ふべきぞ」と見たりければ、起きて、「斯う斯うの夢なん見つる」と云ひて使はで返してけるを、世に聞えて、斯く拜み願ねがひなりけり。牛も黒くて、細細ささやかにをかしげにぞ有りける。繫がねど行き去ることも無く、例の牛の心さまにも似ざりけり。



入道殿を初め奉りて、世の中におはしける人、参らぬ無く参り混み、萬づの物をそ奉りける。唯だ帝、春宮、宮宮ぞえおはしまさざりける。此牛佛、何と無く心地惱ましげにおはしければ、疾く亡せ給ふべきとて、斯く人参り混みて、此聖は御影像を描かせんとて急ぎけり。斯かる程に、西の京にいと急ぐ行ふ聖の夢に見えけり。「迦葉佛當入涅槃の段なり。智者急く結縁せよ」とぞ見えたりければ、いと人参り混む程に、歌詠む人もあり。和泉、

聞きしより牛に心を掛けながらまだこそ越えぬ逢坂の關

人人あまた聞ゆれど、同じ事なれば書かず。日頃此御繪書かせて、六月二日其御眼入れんとしける程に、其日に成りて、御堂のめぐりを、此牛見巡り歩き、もとの所に歸り來て、やがて死にけり。是れ哀れにめでたき事なりかし。御像に眼入れける折ぞ果て給ひにける。聖いみじく泣きて、やがて其處に埋みて念佛して、七日七日に經佛供養しけり。後に此書きし御像を内裏にも宮にも拜ませ給ひける。斯かる事こそ有りけれ、眞の迦葉佛、此同じ日ぞ隠れ給ひける。今は寺の彌勒供養せられ給ふ。此聖も準備きけり。草を誰も誰も採りて参りける中に、参らぬ人など有りければ、其れは罪深きにやなどぞ定めける。さて彼の院の女の御の御惱いみじかりければ、法性寺や何處やと歩りかせ給ひつつ、御修行はせ給ふ。萬づに院も入道殿もせさせ給ふに、つゆ其験無かりければ、思し歎かせ給ふ。此頃入道も、御風など起らせ給ひて、さまざま惱ましう思さるれば、すがすがしくもえ渡り合ひ見奉り給はずなど在于に、尙侍の殿の、尋常にもおはしまさ

で、七八月に當らせ給ひて、月頃土御門殿におはしませば、其御祈禱も靜心無く思されて、少しも隔たり有るさまに思さるる方の事をば、自ら今今と思召しつつ日も過ぎもて行くに、大宮も此同じ殿におはしませば、春宮さまさま覺束なさを明暮聞えさせ給へば、殿の御前げに然ぞ思召すらん、いと心苦しき御事なりとて、如何で此頃の程に行啓あらせんと思して、準備がせ給ふ。六月二十五日吉き日なりければ、其日と思し準備がせ給ふ。今は其日に成りて渡らせ給ふ。大宮は土御門殿の寢殿におはします。東の對に尙侍の殿おはします。西の對に東宮おはします。御消息せさせ給へば、中門より西の廊の西さまに行きたるを、東宮の殿上にせさせ給へり。東の築土に添へて、新しう板屋を造りて、尙侍の殿の侍にせさせ給へり。渡らせ給へる儀式有様思ひ遣るべし。大宮、尙侍の殿の女房、いみじう裝束きたり。春宮先づ寢殿におはしませ、其れよりやがて尙侍の殿の御方に渡らせ給ふ程、云へば疎かなり。御供に仕うまつれる殿上人、此方彼方、御簾ぎはえも云はず耻かしうて、いとど汗に成りて、面赤む心地しけり。庭より仕うまつりたり。尙侍の殿は、七月に當り給ひて、御腹いと膨らかにて、苦しげに見えさせ給ふ。二藍の御衣に透かせ給へる御胸の程、御乳のあたりなど、わざと作りたらん物めきて、をかしげに、らうたげにおはします。御帶きは氣さやかに見えたるなど、模様御目留まり、をかしく見奉らせ給ふを、耻かしげに思召して、打解けぬ御氣色を我さへ耻かしく思召さる。斯くておはします程、殿ばら夜晝参りもて遊び奉らせ給ふ。殿の御前も、外の御歩りきこそ苦しく思召さるれ、氣近ければ紛れ渡りつつ見奉らせ給ふ。萬づ見奉らせ給ふ甲斐ありてめでた

し。斯くて、心のどかに暫しおはしませまほしう、大宮も殿の御前も思召したれど、秋の節分にいと疾く入りぬべければとて、七月三日内裏に還らせ給ふ。いと飽かぬ御有様どもなり。尙侍の殿いたく濡めらせ給ひて、眺めがちにおはしますを、東宮如何にと見奉らせ給ふ。なかなか覺束なかるべき事どもを思し聞えさせ給ひて、歸らせ給ふ程などぞ、いと理無く見えさせ給ひける。御贈物、上達部、殿上人の祿など、疎かならず。内よりは「羨しく」など覺束なさを日日に聞えさせ給へど、大宮、尙侍の殿の御事を見奉らせ給はんとて、猶暫し里におはしますなるべし。尙侍の殿の御祈り、さまざま残る無くせさせ給ふ。斯く云ふ程に、今年は赤瘡と云ふもの出で来て、上中下分かず病みのしるに、初めの度病まぬ人の此度病むなりけり。内、東宮も、中宮も、尙侍の殿など、皆病ませ給ふべき御年どもにておはしませば、いと恐ろしう、如何に如何にと思召さる。七月八日、院より、殿の御前に、「今は限りに成らせ給ひにたり。今一たび見奉らんとなんのたまはする」と有れば、日頃も今日今日と思召しながら、日次などの悪しかりつれば、すがすがしうも思立たせ給はぬに、御使さへ頻りなれば、未の刻ばかりに山の井に渡らせ給ひて、見奉らせ給へば、唯だ影のやうに成らせ給へるものから、御色の白く麗はしく光りかにおはします。いと恐ろしく其れも如何に如何にと見奉らせ給ふ。殿の御前は、あさましく今まで見奉らせざりける事と、塞き敢へず泣かせ給ふ。尼上も院も、いみじう哀れに悲しと見奉らせ給ひて、殿「さて如何が思さる」と申させ給へば、「何事をか、ともかく思ひ侍らん。唯だつらしと思ひ聞えさする事は、此院の御事を、斯からで侍らばやと思ひ侍りし事

をせさせ給ひて、身の徒らに成り侍りぬる事なん有る」とのたまはせて、泣かせ給へるさまなれど、御涙も出でさせ給はず。殿の御前泣く泣く、「然やは思ひ侍りし。今は限りにこそおはしますめれ」とて、御髪下ろして尼にと成し奉らせ給ふ。右馬の入道殿を成し奉らせ給ひける。殿の御前、泣く泣く、「斯くは思ひ奉りけんや。禿におはしましたし折は、尼削ぎ居丈にとこそは見奉りしか。哀れに悲しき事」と、云ひ續け泣かせ給へば、院の内もどよみ泣きたり。御髪削がせ給へる、麗はしき鬘のやうにて、六尺ばかりなり。戒受けさせ給ひて、殿の御前の御袈裟、尼上の御衣など、唯だ御上に取り覆ひ奉らせ給ふ。唯だ萬づ夢の心地のみせさせ給ふ。東宮、中宮の權大夫殿、權中納言殿など、哀れにいみじう思し惑ひ、物に當り給ふ。御物怪ども、いといみじう「爲得たり」と、堀河の大臣、女御、諸隣に「今ぞ胸開く」と叫びののしり給ふ。斯くて夜に入りぬれば、殿の御前、「今夜も侍りて見奉らまほしけれど、心地も例ならず侍れば、見捨て奉る事」と泣く泣く歸らせ給ふ。道よりも御使やがて續き参る。夜の程も月は明し、大殿籠られぬままに「只今如何に如何に」と有る御使頻りにて、日頃の覺束なさを悔しう思さる。曉方に、「只今なん果てさせ給ひぬる」と有る御消息を聞き召す御心の程、思ひ遣り聞えさすべし。山の井には更にいとゆゆしき御隣ども、この殿ばら云ひ續け泣かせ給ふ。げにいといみじう見えさせ給ふ。さてもあさましかりける堀河の大臣の女御の御有様かなと、殿も、院も思召せど、後の悔と云ふ事のやうになん。折しも中將殿の上も御物怪にいみじく懺ませ給へば、是れをいと恐ろしき事に殿の御前思さる。其れも此同じ御物怪の思ひの餘りなるべし。其れ



もいと恐ろしく思さるるなり。山の井には愛無くやと思召せど、然るべき御中らひにて頼みにしも有るまじかりければ、此十一日にぞ吉き日なりければ、其れにとかく爲たてまつらせ給ふべし。尼上いと思し歎けど、とかく熱き程に、日頃に成らせ給はんも憂たて有べければ、斯くともと思すもいと哀れなりなども疎かにぞ。其日に成りぬれば、内にも外にも、此準備をせさせ給ふにも御心惑ひて、はかばかしく思し控てせさせ給ふべくも見えさせ給はず。其日に成りぬれば、院の御車に装束せさせ給ふ。院且つは物をのたまはするものから、御聲も惜ませ給はず。是れに故宮の御事はいみじき事に思召ししかど、其れは大方の口惜しさこそ侍りけれ、是れは様様萬つに片時思し離るべき心地せさせ給はず。月のいみじう、曇り無う、風さへ涼しきに、京出でさせ給ふ程はいと忍びて、唯だ例ざまにぞおはします。殿なども聞し召さんに、斯く立ち混み數多の御中なれば、萬ついと凶凶しう思されんも道理なれば、唯だ常の御歩りきの様にせさせ給ふ。御先に火ともしばかりにて、此殿ばらなどは歩み著かせ給へり。院おはしませば、大藏卿、入道の侍従など、源眞阿闍梨など、大原の入道君など、萬つ事削がせ給ひしかど、また如何でかはとて、仕うまつらせ給ふ。御先に二町ばかり先立てて、阿彌陀の聖の「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と口稱遙かに聲打上げたれば、然ばかり悲しき事の催しなり。おはしました遣らず、涙に御身ども洗がせ給ふ。然らぬ折だに、此聖の聲はいみじう心細う哀れなるに、況して思ひ遣るべし。斯かる有様は、人がちにていみじきだに猶いと悲しきに、萬づいみじく忍び給へれば、人聲もせず、密かにおはし過ぐる程、一條の程にてぞ萬づ例の作法の事どもを爲置

かせ給へりければ、僧も俗も數知らず参り混みて、えも云はず嚴めしくて、巖陰と云ふ所におはしませ給ふ。彼の雲林院の故宮のおはします屋遙かに見遣られて、悲しさ取り重ねて、いみじう思召さる。院の御心地更におはしました遣られず。悲しなど云ふ事は、然は是れにこそ有りければと、あさましくいみじき事ども、有り有りて思ひつるかなと、御袖の雫も所狭きまで思召さる。宮の御供に仕うまつれる人、此度の御供に参りて、人知れず思ひける。其夜は人にも云はで、後に人に語りける。其人は知らず。

夏の夜を分けし其夜も袖濡れき秋の草葉も露ぞこぼるる

とぞ覺えける。はかなき雲烟と成らせ給ひぬ。殿の御前も此頃御心地憐ましく思召されて、此御送りも得せさせ給はで、いみじう思し明させ給ふ。此御供にも様様萬つ細かに推し量り聞えさせ給ひつつ。院は故宮の御供にも、此女御の御送りも、ひたたけて歩ませ給ふ事、又無き事になんおはしましたしける。其れにつけても、「やんごとなき身と成らましかば、宮の御供にも、此御折も、覺束なさをぞ思ひやり聞えまし。そが中にも此度は志の限りは見え奉りぬめり」と宣はすれば、此殿ばらも、また仕うまつる人も、「女の幸ひとは是れをこそは云はめ、一生幾ばくも有らぬに、世の中のためでたき事には太上天皇とこそは申すめるに、斯く下り立ちて扱ひ聞えさせ給ふ事、いといみじく忝なく、めでたき御事なりや。唯だ口惜しき事は、姫宮、若宮などの御有様、え見果てさせ給はず成りぬる事こそいみじき事」など申し思ふ程に、夜もはかなく明け、事も果てぬれば、還らせ給ひぬ。此殿ばらも院の御氣色の疎かならぬを、眞に女の御本意は斯くぞかしとぞ

思しのたまはせける。尼上も月頃御心書れてはかなき菓子だにも聞し召さで、消え入り消え入りせさせ給へば、削り氷ばかりを御前に置きて、人人ぞ勸め参らせける。今年こゝしは此女御殿の御事斯かれば相撲も止まりぬべしとぞ有める。院徒然つれづれに思さるるままに、姫宮の美くしうおはしますを御覽じて、年頃此二所の御事を期待事まてごとにのみ打語りひ聞えさせ給へるも、萬づに思し出でて戀しく、いみじく思ひ聞えさせ給ふにも、涙のみこぼれさせ給へば、「哀れ、何ぞや、幾ばくも有るまじき世に、本意を遂げでや止みなまし。今は何事も誰が御爲めとか思はん。唯だ此姫宮の御事をこそは」と思召すに、様様哀れも盡きせずなん。宮は、「殿の御前、行末遙かに尋常ならぬ御心掟ても、唯だ一所の御縁ゆかりにこそは有りつれ、今は如何がは」など夜はつゆ御殿籠られぬままに、萬づを思し續けて、起き明し歎き暮らさせ給ふ。此夏は故宮の御方に附けつつ、然るべき殿ばら穢らひ給へり。また此頃は道理の御様なれば、世の中の人、氣ざやかにえ忌み敢へぬさまなめり。殿の御前、「院を年頃大かたにこそ思ひ聞えつれ、まめやかに思召したるが、いと哀れにも」と思ひ聞えさせ給ひつつ、見ゆる御菓子など度毎に夜夜半分かず奉らせ給ふ。御忌に籠りたる僧どもにも然るべき精進の物何かと常に問はせ給ふ。云ひもて行けば何時も同じ事なり。斯く眞心に思しあつかはせ給ふこそ、いみじかりける御幸ひなりけれど、思し慰めつつぞ過させ給ひける。堀河の一の宮の御乳母さへ亡せにしが、いとど哀れに思ひ聞えさせ給ふに、二の宮は法師に成し聞えさせ給はんと思して、醍醐の座主は花山院の御子におはしませば、醍醐にぞ時時通はし聞え給ひける。萬づ心のどかに思し残させ給ふこと無げなり。此女御の御

服奉るとて院の詠ませ給へると、人の語り侍りし。まことにや、覺束なし。

別れにし春のかたみの藤ごろもたち重ね着る我ぞ悲しき

御法事は八月十餘日にぞ思し掟てさせ給ふ。尼上、殿は唯だともかくも、院の御心に任せ聞え給へり。只今尙侍の御事を如何に如何にと靜心無く思さるらん。「唯だ此處に掟てつとも、事ども缺くべきにあらず。今は法服などの事を準備かせ給ふべき。絹など只今出で來侍りなんとす」など申させ給ふ。萬づよりも尙侍の殿此赤瘡出でさせ給ひて、いと苦しう思召したりとて、殿にはのしり立ちて、いみじく思し慌てさせ給ふ。今年こゝしは斯う尋常ならぬ人の月足らずなどして、皆事ども誤まるなれば、如何に如何におはしませんと、思し歎かせ給ふも道理なり。七月廿餘日の事なれば、例も此頃は相撲にて、いと理無き暑さなるに、折しも斯く惱ませ給ふ。世にいみじき事に思されたり。東宮、内などには唯だ氣色ばかりにて癒らせ給ひてけり。この尙侍の殿は此月などにこそは然おはしますべきに、いといと恐ろしき御事なりと歎かせ給ふに、御瘡いと多く出でさせ給ひて、平かにおはしませど、日頃苦しう思されて、いと堪へ難げなる御氣色に成りつれど、晦日には癒らせ給ひぬれば、世に嬉しき事に思し喜びたり。されど、まだ程も無ければ、御湯なども無し。時時御物怪の氣色ぞおはしますを、いとど恐ろしき事に思召さる。院は女御の御惱の折、堀河の大臣の、「尙侍の殿の御産屋に、必ず参りて見奉らん」と有りしを人知れず常に恐ろしう思し出でさせ給ふ。中納言殿の北の方も、月頃尋常にもおはせざりければ、折悪しき瘡を如何に如何にと、大納言殿も思し歎き、中

納言も如何にと思しつるに、月頃いみじう細り廻せて、在りし人にも有らぬ御有様を、如何にと恐ろしくて、様様の御祈りをぞ爲盡させ給ふめる。尙侍の殿の御槍乾れさせ給ひつれど、御物怪の氣色のいと恐ろしくて、まだ御湯殿も無し。斯かる程に月も立ちぬ。此月には必ずおはしますべければ、今や今やと待ち思召さるる程に、二日の夕つ方よりいと惱ましう思したれば、御修法、御讀經など、さまざまの御祈りの僧、心を合せて聲も惜まず鬨繞し奉る程の揺り合ひ、いと喧囂し。殿の御前、「まだしきに、いといたるな喧囂りそ、眞の折にこそは」とのたまはするものから、我が御心地もいと慌ただしげにおはします。白き御具ども近く取り寄せ、女房達白き装束ども、里なるは取り寄せなどして、萬づ其程の御用意、いと限り無し。東宮にも聞し召して、御使ども隙無し。されど其夜も過ぐさせ給ひつ。又の日まで惱ませ給ふ。御物怪ども數知らず出で来て、ののしり騒ぐ。各驅り移して、僧ども、預り預りに加持しののしれど、喧囂しくのみ有りて、つれなくおはします。東宮、宮の大夫達、限り無く覺束なく思せど、え參らせ給はぬ程ぞ心もとなくいみじう思されける。堀河の大臣、女御、さし續き出で来てののしり給ふさま、いと憂たて恐ろしう生憎げなり。世の人、家の内に残りたらんや。交らひせざらんこそは、女などは残らめと見ゆるまで、いといみじう、國の守などまで參り集りたり。大宮も此方に渡らせ給ひて、同じ御心に見奉らせ給ふ程など、えも云はずめでたき御中らひなり。年頃の人人、いづ方にも睦まじう思召す限り、近く侍ひて扱ひ聞えさす。春宮より御使隙無し。日頃も惱ませ給ひつれば恐ろしうて、萬づの御調度ども取り出でて、御誦經に運び出でさせ給

ふ程、げにいみじからん御寶物、何にすべきぞと道理に見えさせ給ふ。内藏の命婦、何れの御前達の御折も先づ物の上手に仕うまつるに、況いて此度は「小式部の君若き人なれば後ろめたし、我こそ此代りも取り重ね仕うまつらめ」と萬づ準備ぎ仕うまつる。今や今やと思し急ぐに、心より外の事は、斯様の事にこそ有めれ。返す返すも心もとなく思召す。院には、此事ども聞し召して、堀河の大臣、女御やなど、さし續き、いと恐ろしき氣はひにおはすらんを、返す返すかたはらいたく、苦しう思し遣らせ給ふ。此邊には然様におはしませんが、道理なり。此御折斯かれば、殿如何に我をも心づき無く思すらんと思召すも、尋常なるよりは、煩かしう思召さるるにも、他事ならず、此姫宮、若宮などを思ふにこそ斯く苦しけれなど思召されける。はかなく過ぐる月日につけても、物のみ哀れに思し續けらる。萬づよりも此御事の心もとなきを、只今は世の中に撼揺りたり。御祓の音などの喧囂しささへいみじうて、何の事もつゆ聞えやらず、鳴り合ひてこそそのしらせ給ふめりしかとぞ。

## 楚王の夢

尙侍の殿はいみじき御調度どもを御誦經にと残り無く取り拂ひ出でさせ給ふ。世の中の人残り有らじと見るまで、許多廣き殿の内隙も無し。あないみじと思す程に、申の刻ばかりに、御子生れさせ給へる、あな嬉

しいみじと思して、また後の御事を如何にと思せど、先づ何ぞと、内にも外にもゆかしう思す程に、男御子にぞおはしましける。其程、殿の御氣色より初め、許多殿の内の人思ひたる有様、唯だ我身一つの喜びに思ひたり。御蔭にも隠れ奉るべき其殿の内の人、ともかくも思し思はん、道理にいみじ。是れは何の物の數にも有らぬ卑しの下人の男さへ笑みまけ嬉しげに思ひたる様、云へば疎かに、今一つの御事に由り、今人どよみののしりたる程に、程も無く平かにせさせ給へれば、かき臥せ奉る程いみじうめでたし。大宮の御前、我が御時、内、春宮の御折は、何とも思されざりしかど、世の響きまで、斯様にいみじかりしを我はともかくも覺えざりしに、此御事を御覽する甲斐ありて、いと哀れにめでたう思されて、今は彼方に心安く渡り侍りなんとて、寢殿に歸らせ給ふ程など、いみじうめでたしや。此御中らひは、何方にも珍らしげ無く餘り心安くやと、人は推し量り聞えさせたれど、是れしもぞいみじう耻かしう、心にくく申し交させ給ふ。是れを例にすべきなりけりと見えさせ給ふ。さて東宮より何時の程にかと見ゆるまで御劍持て参りたる程、いみじう何時しかと思召させ給へるにやと見えたり。御使祿賜はりて退かづる程、世の常の事ながら、其折は、あなめでたと可惜しう見えたり。御湯殿やがて今日の内に事あるべければ、御書の博士召し、弦打に五位十人、六位十人など召して、むげに夜に成りて、儀式有様細かならねと思ひ遣りて在りぬべし。殿の御前は、若宮の御氣近き程に慎ましう思されて、少し御屏風などの隔てある程にて、有べい事ども關白殿を初め奉り然るべき殿ばら定めさせ給ふ。御祿の吉平、守道など聲も囁れたりつる皆祿賜は

りて、世にめでたき氣色にて参退かでぬ。さて御産養は、三日の夜は關白殿せさせ給へり。五日の夜は入道殿、七日の夜は大宮せさせ給ふべし。皆御定め成りぬ。關白殿かねての御用意ありつる事なれど、また俄かなるさまに思召されて、急ぎ出でさせ給ひて、いみじき事ども掟てのたまはず。色紙などは豫て漉かせ給へれば然様の事は心のどかなり。子持の御前の儀などは皆有べい様にし置かせ給ひて、唯だ物盛るばかりの程に有れども、猶心慌ただしうて、手を分かたせ給ふ。女房の白き装束ども、白き衣一襲に織物、羅などを上着にて、裳、唐衣、えも云はぬさまさまの物にして、前前、斯かる事どもは舊りにしかども、今見る折には珍らしう鮮麗に見ゆる、例の事ぞかし。尙侍の殿は更なりや、大宮の御方の女房さへ曇り無う爲渡されたるぞいみじき見物なりける。若宮の又の日の御湯殿の有様いみじうめでたきに、殿の御前世に慎ましげに思召して、御屏風の上よりさし覗かせ給へれば、若き人人、打米を生憎すれば、御袖几帳の程もかしく見えさせ給ふに、子持の御前此御湯殿をゆかしう思召して、いわけなく立ち出でさせ給ひて見やり奉らせ給へば、殿の御前は、「あな恐ろし、倒れさせ給ふな」と申させ給ふものから、哀れに愛くしう見奉らせ給ふ程も、げにぞ道理にめでたかりける。若宮の御湯殿はてて、御前にそそくり臥せ奉りたるを、殿同心に見奉らせ給ふに、尙侍の殿「斯くて侍るをば如何が思す」と見えさせ給へば、殿「いとめでたし、こそ見奉れ」と聞えさせ給へば、「されど、其れよな、え堪ふまじき心地し侍る。いと理無きぞ」と聞えさせ給へば、「あなゆゆし、斯くなのたまはせそ」と申させ給ふ。日頃赤瘡よりして、打續き御

物怪のゆゆしかりつれば、いみじう弱らせ給へるに、物もつゆ聞し召さず。御物怪その心地音無く、皆人弛みたり。且つは恐ろしと思召しながら、いと斯ばかりの御宿世なれば、誰も猛う心安く思されたり。日頃御湯殿も無かりつれば、明日ぞ御湯殿あるべければ、明日に疾く成れかすと、湯浴みて爽かに成らんとたまはず。御前にも許多の人睡も寝ず、互に起きつつ、其事と無けれど萬づに仕うまつり明かす。關白殿には、明日の事をいみじく準備がせ給ふに、夜も明けぬれば、殿の御前、夜さりの御設備立ち騒ぎさせ給ふ。御讀經、御修法の僧なども今宵は少し遠く退けさせ設備はせ給ふ。日頃埋もれたりし池、遺水なども、昨日皆掃はれて、心行く様なり。萬づ設備ひ急かせ給ふ。若宮の御湯殿も今日は疾くなど催促し仰せらるるに、辰の刻ばかりに子持の御前いたう打嘔吐ばせ給ひて、いと苦しげなる御氣色おはしますを、御前に侍ふ人人、如何に如何にと見奉りて、殿の御前に「斯く」など聞えさせ給ふ、僧なども遠く退けたれば御物怪のするなめりとて、御讀經また然るべき僧ども皆参りて、同心に、いとどろどろしく、例の物怪、さまざまの人人召し出でて、或るは傍より叫びののしり出でて、僧達皆邊邊に加持すれば、例の響動り合ひたる様も、どよみにたり。いたう日頃弱らせ給へるに、御物怪の取り憑き奉りにければ、すべて御氣色事の外にて、物もはかばかしくのたまはず。堀河の大臣、女御などの御靈、すべてゆゆしき事どもをぞ云ひ續けののしり給ふ。御帳の外に御枕の傍の方にて、心髻僧都、權僧正など加持参らせ給ふ。御讀經にも聲好き僧どもの限りは御前近く侍ひて、聲も惜まず、また何れの時にかと道理にいみじ。御調度ども残る

無う御讀經どもに運び出ださせ給ひて、更にいと堪へ難げなる御氣色にて、未の刻ばかりに成りぬ。雨さへいと憂たて降れば、萬づ鳴り合ひたり。世の中には限りにゆゆしうさへ申すなれば、宮宮の御使類りて、春宮よりはた際も無けれども、御返りはかばかしく聞えさせ給はず。殿の御前、御帳の中に兒どもをすするやうに、つと添ひ臥し給ひて、泣く泣く抱へ奉らせ給へり。大かた誰も誰も物覺ゆる人無し。弱らせ給ふ御聲もやがて失せもて行くやうなり。「あないみじ、心憂きわざかな」と思しながら、萬づを爲盡させ給ふ程に、酉の刻ばかりに、すべて唯だ蚊の聲ばかりにぞ通はせ給ふに、許多満ちたる僧俗、上下知るも知らぬも無く、觀音を念じ奉りて、額を著き、ののしる。えも云はぬ者まで涙を流して、「觀音、觀音」と申さぬ無く、唯だ額に手を當てて、立ち居禮拜し奉らぬ無し。今は加持の聲も聞えず、御讀經の聲も聞えず、「觀音」とのみ申しののしる。一人は一聲を申すだに如何かは驗おはするなるに、況して許多の人の同じ心に一時に念じ奉る程は然りともそこそは見えさせ給へ。然れどすべて限りに成り果てさせ給ひぬ。御年十九、あないみじ、あさましと思召す。殿の御前は、やがて差し退いて、あさましくて臥させ給ひぬ。主計助守道、おはします對の上に御衣を持って上りて、萬づを申し續け招き奉る。すべて限りにおはしませば、大方殿ばら、怠むな怠むなと僧達をも頼もしう云ひ行はせ給へば、僧も同じ人なれば、泣く泣くいみじ悲しと思ひ思ひ、「觀音、觀音」と申しながらも、又いと情無う佛をも恨み申して、むげに心地も弛みにたり。上の御前は唯だ子持の御身に一つに圓がれて臥させ給へり。女房どよみ泣きたる際、制すべき方も無く、いみじく

ゆゆしとは是れをだに云はでは何事をかはと見えたり。關白殿、内の大殿、泣く泣く参り寄りて、萬づに抱へて御湯参らせ給へど、返しつづつ聞し召さず。あさましき御事をば擱きながら、斯うおはします事をまた騒がせ給ふ。關白殿の産養の物どもは、申の刻ばかりに持て混みて、模様立ち彷徨へど、斯かれば如何にと云ふ人も無し。また事の由をだにえ申さぬ程、さて是れを如何にせん如何にせんと持てさまよふ。殿の中親しきは道理なり、物の哀れをも知るまじき者ども涙を拭はぬは無し。斯く云ふ程に戌の刻ばかりに成りぬれば、殿も生き出でさせ給ひて、大方只今は御涙も出でやらず、在るにも有らでおはします。世のはかなさはれにつけても哀れにいみじ。一昨日男御子生れ給へりとして、世にののしり、めでたう、内までも聞し召して羨しげに思召されたり。今日斯く思ひ掛けぬ夢を御覽じて、然は心憂きわざかな、何事も常ならぬ世は例の事ながら、猶此御事はすべてあさましう、如何なる者、斯くし奉りつらんと、萬づに佛神もつらく情無う覺え給ふ。秋の夜と云へど、人のとかく眠るこそ有りけれ、やがて斯くて明けぬ。暫しは御枕も何も同じ様にておはしますせつれど、夜も隔てぬれば、いとあさましう思召しながら、御几帳、御屏風など様殊に立て成させ給ひなどして、殿の御前にも、上の御前にも、御殿油を取り寄せて近う掲げて見奉らせ給へば、聊か亡き人も覺えさせ給はず、白き御衣の薄らかなる一襲奉りて、まだ御帶もせさせ給へり。御乳はいと美しくげにおはしますが、いたう硬るまで張らせ給へれば、白う圓く、をかしげにて臥させ給へるに、御髪のいと煩たう多かるを、いと緩う引き結はせ給ひて、御枕上に打置かれたる程、いとおどろおどろ

しう寢させ給へるやうなるを、殿の御前、上の御前、今ぞ泣かせ給ふ。「若宮、あながちに若う幼たくて御き御身の、何方とて振り離れては我等を捨てておはしぬるぞや、いみじき鬼神なりとも人の許さぬをば奉て行かざなるものを、返し給へ、返し給へ」と泣き轉ばせ給ふに、御乳母小式部の君は、「此處をば捨てさせ給ひつるか、御供に参らん、参らん」と泣きののしる。年頃仕うまつりつる女房の若きは若きにつけて戀ひ悲み奉り申す。年長たるは其方につけて云ひ續け泣きたる際ども、げにげにと聞えて、すべて堪へ難く思ひて惑ふ人多かりき。明けぬれば、吉平召しに遣はしたれば、参りたり。然るべき事ども關白殿泣く泣く問はせ給ふ。殿の御前は大方物も覺えさせ給はねば、筋無くておはします。吉平も涙に咽びて、何事もすがすがしう申さで、漢詩めらひて申す。「今日こそは先づ歎め奉らせ給ふべき日にて候ふめれ」と申せば、「然ば斯くておはしますべきにもあらず、何方にか率て奉るべき」と問はせ給へば、「法興院は善き方に候ふめり、今宵法興院におはしますさせ給ふべう」と申す。御葬送は此月十五日と定め申して、岩蔭にせさせ給ふべきなど、細かなる事ども申しつづも、哀れに悲しき御事どもにも念じ敢へず、上の衣の袖も捲るばかりなり。殿の御前に此事ども委しく申させ給へば、「然ば、夜さり参れ」と仰言承はりて退かつる程、一昨日、御秋の驗ありて男御子平かに生れ給へる、是れに勝る事は何事かはとて、祿賜はりて退かでし吉平とも覺えず、唯だ一二日の程に然は斯くこそ有りけれと、泣く泣く退かでの。日射し上がる程に、夜さりの事ども設けさせ給ふ。若宮は即ちより、寢殿に通る渡殿におはしますさせて、内殿の命婦、殿の官旨など添

ひ奉りて、阿波の前司頼成が妻の、今の太貳の女なる、其れ豫て仰事ありしかば、即ち参りにし、御乳母にて侍ふ。とまれ斯うまれ、大宮こそは取り扱ひ聞え給ふべけれど、日次などで撰りてとなりけり。夜ざりは殿の御車に御装束させ給ふ。例の人の御歩りに、此度は有るべけれど、またいと事の外なり。殿は唯だ臥し轉び泣かせ給ふより外の事無し。道理ながらも、いみじかりける御思ひかなと見えさせ給ふ。暮にはやがて歛め奉りてこそは御車におはしますべければ、上の御前は御帳の内に入らせ給ひて、泣く泣く見奉らせ給ふ。斯くて亡させ給へば煩かしく思召さるらんとて、小式部の乳母萬つに下り立ちて、御湯殿させ奉る。此度はばかりの御宮仕と思ひつつ云ひ續け泣く聲ぞいみじきや。上の御前の御身を探らせ給ふに、いと冷かにおはします。是れこそは例の人に變らせ給へる事は有りけれど、殿も上も、「我を捨てては何方、何方」と泣き轉ばせ給ふ事限り無し。御衣など着更へさせ奉らせ給へり。萬つ出だし奉らせ給ふ程ぞ、げにいみじきや。日暮れぬれば急ぎ立ちて入らせ給ふべき儀式持て参りたるも、又どよみたり。然るべき睦じき限りの人人して入れ奉る。殿も上も、目も昏れて見奉らせ給はず。「いであなあさまし、ゆゆし」とのみ同じ事をぞ繰返し云はれける。さて柩に入れ奉りて蓋を固めなどし奉る程は思ひ遣るべし。法興院に上の御前もと思召せど、其れはた便無かるべし。御送葬までこそ殿も彼處におはしますべけれ、御堂に歸らせ給ふべければとて、上の御前は我が堂にぞ渡らせ給ふ。程も遠からねど、さて火ともし時に成りぬと申せど、如何でかすがしからん。斯く成らせ給ふ事は萬壽二年八月八日、御産成りて五日、亡せ

させ給ひて、六日の夕に法興院に渡らせ給ふなりけり。御車かき下ろして、おはします對の南の東の方より出でさせ給ふべきなりけり。さて御車にかき載せ奉る程など、殿の御前も物覺えさせ給はで、臥し轉ばせ給ふ。關白殿、内の大殿などは御草鞋と云ふ物を穿かせ給ひながらこそ立ち泣り泣かせ給へ。参る女房も、留まる女房も、大方殿の内の人諸聲にのしりたるは、いとゆゆしう悲し。御車は四位五位仕りまつれる。殿の御前、御車の後に歩ませ給ふ。いと哀れに忝なく見えさせ給ふ。上の御前は、「あないみじや、許多の中を引き離れておはして、如何なる者の様姿を見給はん」と泣き憧れさせ給ふ。法興院と此殿と遠からぬ程なれど、殿の御前、おはしましやらせ給はず惑はせ給へば、片つ方の御手は、關白殿捉へ奉らせ給ひ、今片つ方は三井寺の僧都抱へ奉らせ給ひて、御腰をば内の大殿押し奉らせ給ふ。然るべき睦ましき殿ばら、殿おはしませば皆仕りまつり給へり。いみじき事は山の座主の杖に掛りて、え歩みやらで、泣く泣く仕りまつり給へる程も、萬つ疎かならず見えたり。道すがら哀れいみじくしておはしましぬ。法興院の北に別當の坊と云ふ屋に、御車ながらかき下ろしておはしまさせ給ふ。其傍なる屋にぞ殿の御前はおはします。日頃御几帳、御屏風の隔たりだに無くて、萬つに扱ひ聞えさせ給ひつれど、限り有るわざなりければ、殊異におはします程、いみじく哀れに悲し。女房おはしますやうに侍ひて、萬つ御臺など例の作法に参り据ゑたり。殿の御前大殿籠らぬままに打おはしましたつる御車の、前板と云ふ物に押掛りて、何事にか有らん、打泣きて、泣く泣くのためはせつつ明させ給ふ。其後、曉には懺法、夜ざりには御念佛と、然るべき僧と

も具しつ御車を廻らせ給ふ。御饌など聞し召す。御まかなひは御乳母の小式部の君ぞ泣く泣く仕うまつる。哀れに悲しき事多かり。萬づよりも殿の御前のつゆ御臺も聞し召さず、弱らせ給ふを、いと恐ろしき事に且つは殿ばらも宮宮も歎かせ給ふ。上も我が御堂に渡らせ給ひて、何事をかは、唯だ涙に沈みて過ぐさせ給ひけり。春宮、中宮の大夫達参り給へれど、え上り給はず、殿の御有様を誰も後ろめたく思し歎かせ給ふ。山の井の女御殿は、さても月頃然ばかり惱ませ給ひて、限り限りと見えさせ給ひつれば、道理におはしますに、此の御事ぞいとゆゆしう、思しも掛けざりつる事なるや。面白き櫻の咲き調ほりたるが、俄かに風に残り無く散りぬるにぞ、いと善く似させ給へる。世の中に斯かる事は無きにも有らず。其れは殿の御妹の院の女御殿と申しけるは、正月の庚申に鶏鳴くまでおはしまして、曉に御脇息に押掛らせ給ひて、やがて亡せさせ給ひにけり。其れは俄かにいみじき方こそ有りけれ、人の心を盡し惑はせ給ふ方は無かりけり。是れは月頃いみじう數限り無き御祈りいみじかりつるに、恐ろしかりつる御惱も癒らせ給ひて、めでたき男御子生れ給へる程などは、斯くあさましかるべしとは誰かは思し掛けつる。猶猶いと云ふ甲斐無くいみじきや。若宮のいと美しく物きららかにおはしますに付けても、大宮はあさましう哀れに悲しき御形見、疎かならず思召さる。東宮には思し歎くとも世の常なり。其儘の覺束なさをだに、さばれ、斯くおはしますべかりけるに、いと氣近かりし御對面の日頃の程なども、昨日今日の事と思し出でられて、御涙も止まらせ給はず。京極殿にて何れの日ぞや、二藍の御衣に紅の御袴奉りたりし御胸のわたり、御

乳の程のさま造りたらんやうに美しくしかりしに、御乳の尖は打赤みたるに、御帶の程いと鮮麗なりしなど、萬づに戀しく、また如何でかは夢にだに分明に見え給はば、慰むやうも有りなんかしと、心憂く思召し入りたり。大宮いと恐ろしく思召して、御修法など御祈りどもの事掟てのたまはず。参り初めさせ給へりし折などは、我が御年も若う物耻かしう思召されしを、此年頃は萬づ打解け、心をかしう、有らまほしかりつる御中らひを、侍ひつる女房まで戀ひ聞えさせぬ無し。尙侍の殿の女房は、やがて若宮の御方にと、大宮より仰事賜はず。其れにつけても夢の心地すべし。兒どもは湯瘦など云ふものして、日頃は瘦するものぞかし。若宮はやがて肥えに肥えさせ給へるも、哀れに、物思し知る程なりせば斯からましやはと見えさせ給ふ。殿の御前は世の中を深く憂きものに思召して、「今は里住み、更に更に深う山に住まん」とのたまはせて、眞の道心發させ給へり。御乳母の夫播摩守泰通、はかなき魚、菓物、何の物も見ゆるをば夜夜中分かず、先づ先づと運び参らせし事の絶えにたれば、哀れに悲しく云ひ續け戀ひ奉る。殿の御前の今年は慎ませ給ふべき御年なれば、御命延びさせ給ふべきなめり。いと斯かる事を思召すはと、世の人申し思へり。世の重鎧にておはしますば、何れの民も唯だ殿の御命乞ひをのみ申し思へり。民部卿など参り給ひて、「猶少し思し慰めさせ給へ。此事のみ世に始めたる事ならず」と聞え慰め給へば、「さこそは思ひ給ふれ、傍のえ然らぬ人人も多くおはし侍れば、命は惜しくこそ侍れど、唯だ是非無う戀しきに、佗び侍るぞや」とのたまはずるには、げに誰も誰も忍び敢へ給はず、また泣き給ひぬ。斯くて亡せ給ひぬる人は、いと煩かしう思さるな



るものをとて、山山寺の僧どもに湯浴むさせ給ふ程も、いとodorodoroshi。殿の御前思召し佗びては、

かの世には我より外の親や有らん然てだに思ふ人を聞かばや

小式部の乳母、

心だに此世に協ふものならば在すらん様も行き見てまし

是れのみならず、またまたも有るべし。歌は心を述べと云ひてこそ、をかしきにも、めでたきにも、哀れなるにも、さまざまの人の先づ詠み給ふものなめればなるべし。斯くて十五日に成りぬれば、其また曉に檢非違使ども召して、京極より上らせ給ひて、一條より西さまにおはしますべく、道造り拂はすべき由仰事のたまはせても、岩蔭には萬つ運び仕うまつるべき由の仰事のたまはずとも、御涙を拭ひ敢へさせ給はず、おぼはれ泣かせ給へば、仰事承る人人の心の中どももえ忍び敢へぬさまなり。殿の御心にも、此度ばかりの事にこそ有れ、今はいみじう思ふとも何事をかは仕うまつらんずると思召して、萬つ爲盡させ給ふ。日の暮るるままに、法興院の内のしり騒きたる有様、哀れ悲し。御参りや御産屋など度度のしりし御準備の様に引き違へ、悲しき事限り無し。此殿ばらをば更にも云はず、然るべき上達部皆参り混み給ひて、さすがにえ座には著き給はぬものから、然るべき所に立ちさまよひ、榎材木の上などにおはし並らばせ給へり。雨降りて日頃も煩かしげなりつるに、夜より雨細やかに降り出で、其人人潮解けたらんは然るものにて、殿を初め奉りて、如何でか歩ませ給はんずらんと、世の中の簀笠など數を盡し騒ぐ。申の刻ばかりに雨

止み空晴れて、風打吹き、道なども唯だ乾きに乾くに、いとめでたし。是れにつけても、殿の御歩りきは昔も今も猶いと舊り難き事に申し思へり。秋の日もはかなく暮れぬれば、道の程もいと遙かなり。又えすがすがしうおはしまし道らじとて、吉平、時は酉の刻を吉き時とて慇懃し申せば、少少の事だに如何がはある。況して然ばかり莊嚴しき御有様、いとど所狭げなり。然るべき四位五位などの御供に仕うまつるは、さすがに緋の装束をしたるものから、憂たてげなる者ども上に着たり。御車に附きたる人人、御前に火ともしたる人など、すべて二三十人の程の人の装束は、皆同じさまに爲たり。殿の御前も、哀れに悲しう奉りたる御供の女房車多くも有らず、二つぞ仕うまつりたる。其れも唐衣麗はしう着たるが上に、また藤の衣を着て、其れも涙に絞るばかりなり。御念佛の僧ども、山方、奈良方、然るべき所所、數知らず打群れ打群れ参り混む。月も曇り無くめでたし。何事もいみじう爲調へさせ給へり。世の中の人は一條の大路より斯く道拂ひおはします程なども、いみじき見物に思ひたり。關白殿は御忌の日に當らせ給へれば留まらせ給ひぬ。内の大殿でおはします。其れも猶忌ま忌ましき事ぞかし。されど殿の御前のおはしますが後ろめたきに仕うまつり給ふなるべし。哀れに悲しとも疎かなり。おはします程の有様云へば疎かに駭めし。西は大宮よりさし過ぎ、東は京極を際に續き立ちたるを、又おはしましつる法興院までぞ名残は續きたる程推し量るべし。また世の中を昔見たる女、翁、また斯かる猛なる事は見すなどぞ、泣く泣く申し思へる。年頃いみじき天變とてのしりつるは、げに空しくやは有りける。春は皇后宮崩させ給ひぬ。立ちぬる月には院

の女御崩せさせ給ふ。また斯くおはしまして、斯く一天下の震駭りたる、是れこそは天變なりけれ。今は何事の有るべきぞと見えたる。おはしまし著きぬれば、殿に年頃使はせ給ひて睦まじう思召さるるままに、今の信濃守やすより、大炊頭爲基、備後の前司きんのりなど、すべて唯だ斯様の人をぞ萬つにさし預けさせ給へれば、げに火水に入りて仕うまつれど、さすがにしも知らざりける事にて、夜も更け鶏も鳴きぬ。あさましう月の明くめでたきに、許多の人人参り混みたるに、殿の御聲の哀れに悲しきにぞ許多の人もえ忍び敢へざりける。煙にて上がらせ給ふも、やがて靡きて、何れの雲とも御覽じ分くべくもあらぬに附けても、御胸塞がりて、分明にも御覽ぜられず。斯かる程に、船岡の南の方に、火こそ灰めきて、尋常ならず哀れなる事ぞ見ゆる。人人見やりて、「哀れ彼れ見よや、早や又斯くも有りけるは」など見やり騒ぐに、或る者の申すは、尙侍の殿に小左衛門とて、いみじうらうたき者に取り分き思したりしが、日頃彼れも煩ひてえ参らざりしに、此亡せさせ給ひし日ぞ参りて見奉りて、退かでにけるままに、同じ日やがて亡せにけるが、折しもこそ有れ、今宵しも此邊近うするなりけり。人人哀れなりける由を云ひ思へるに、女房車も確かに聞ひ聞きて、いみじう哀れに見遣る。高き短き斯程の御有様にこそよ無けれ。此事のさま、煙にて昇る程は見え分かぬわざになん有りける。殿ばらなどの哀れがりのたまはするを、殿の御前にほの聞し召して、「哀れ問ふべかりける事にこそ有りけれ、物などを遣るべかりけるものを、人よりも哀れと思したりしかば、同じ所にや参りたらん」と思召すも悲しうて、泣く泣く御覽じ遣れば、火のいと灰かにて、人たども多くも見えぬ

有様の、哀れに心細げなり。返す返すも哀れがらせ給ひて、法事にだに必ず物遣はさんと思召しけり。女房車返す返す哀れに見遣る。今宵の月はめでたきものと、昔より云ひ置きたれど、眞に明きはいと有り難うのみ有りけるに、今宵の月ぞ眞に赫夜姫の空に昇りけん其夜の月斯くやと見えたる。風さへ涼しく吹きたるに、時時此あたり近う赤雲の立ち出づるは、我君の御有様と見ゆるに、爲ん方無く悲しかりける。上の御前は御格子を下ろさで、やがて端におはしまして、「かの岩蔭は何方ぞ」など人に問はせ給ひて、其方さまに眺めさせ給ふに、赤き雲の見ゆれば、先づ其れならんかしと、御衣の袖のみならず、御身さへ流れさせ給ふばかりなり。東宮は今宵と聞し召したる事なればつゆ睡眠ませ給はず。彼の昔の楚王の夢を思し合せられて、あさましく思し惑はせ給ふも斯様にてやとぞ人申し云はせける。

程も無く雲と成りぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ

返す返すと云へど、猶思し掛けさせ給はざりつる御有様ののみ心憂し。夜も明けぬれば、殿の御前には木幡へと思召せど、さまでは如何でかなど、人人聞えさせ給はば、木幡へは別當僧都、播磨守泰道、すべて然るべき人人ぞ参りける。殿は御堂におはしまして、やがて上の御方におはします。日頃は然ても此御扱にて過ぎつれば、慰むやうも有りつるに、今は斯くぞかしと思召すに、むげに思し盡れさせ給へれば、山の座主参り給ひて、「いみじく思召したる事なれば、聞えさせるにつけても、心痺きやうに侍れど、猶如何に思召し取らせ給へるぞ。今はとぞますますに思してこそ慰めさせ給はめ。此世に御幸ひも御心掟ても、殿のやう

に思召し置きつる事、一事も違はせ給はず、相協はせ給ふ人はおはしましたんや。此三十年の程は更に思召むすぼほるる事無くて過ぐさせ給ひつるに、如何でかは斯かる事も混らせ給はざらん。此娑婆世界は苦樂共なる所とは知らせ給ひつらんものを、佛だに凡夫におはせし時、堪へ難き事を堪へ、忍び難き事を能く忍び給ひてこそは佛とも成り給ひ、衆生をも濟し給へ。今は此御女一所をこそ且つはいみじかりける我が亡者かな、許多の年月の念佛や徒らに成りぬらんと心憂く思召し、また押返しては、是れいみじかりける善知識かな、樂ありて苦は有りとのみ知りたりつるを、樂も苦も共に知らせつる事と、萬づに方方に思し得て、眞心に念佛せさせ給はば、我が御爲めの善知識とも成り、亡者の御爲め、菩提の便りとも成らめ。年頃は懺悔とこそ見奉り侍れど、あさましうはかなうおはしけり」と、世間の理を申し盡し給へば、「如何がは、然思ひ取りて侍るや。されど其れが唯だ戀しきなり」とのたまはするままにも、御目より水精を貫ぬきたるやうに續きたる御涙いみじうて、山の座主もよよと泣き給ひぬ。御念佛の折毎に、殿の御前皆參らせ給ふに、御涙もやがて度毎に續き立ちたり。いと忝う、「猶よろしき程に興じ聞えさせ給へかし」とのみ申す人々多かれど、聞し召し入るべきにもあらず。若宮の御乳母頼成が妻は煩ひて退かでにけり。其後は讃岐の守なりつねが女の、宰相中將の子生みたる、また大宮の御方の紫式部が女の越後の辨、左衛門督の御子生みたる、其れぞ仕うまつりける。大宮の御方には猶此程過ぐさせ給ふべきなりけり。哀れに愛くしう見えさせ給へれば、つと抱き扱ひ聞えさせ給ふ。御堂の宵曉の御念佛もいみじう哀れなり。彼の小左衛門許

は後に物など遣はしたれば、左衛門の内侍いと哀れに思ひけり。七日七日は御經佛供養せさせ給ひ、然るべき御具ども度毎に御誦經にしてせさせ給ひけり。院の女御の御法事いと近う成りぬれば、其事ども準備がせ給ふ。院は今殿にともかくも申すべきにあらず、何事も唯だ此處にせさせ給ふべし。法服どもなど日頃準備がせ給ひてければ、皆出で來にたり。僧前なども外に煩かしう云ふべきにあらず、萬づ差し合ひたる頃事繁きに、いと煩かしとて、唯だ親しき者どもにせさせせんなど、殿ばらにも聞えさせ定め給ひける。「式部卿の宮、中務の宮など、然るべき事、云はぬ事など、恨み給ふめり。其れにも聞えてん」など宣はすれば、殿ばら、「げに然る事にて候ふ」とて、皆各然るべき事ども仕うまつり給ふ。次でに院の宣はす。「此御事を其折は片時有べうも覺えざりしかど、自ら程經れば、斯くて物を云ひ、何かと覺ゆるわざにこそ有りけれと、我ながらも心憂しや。さてもあさましう後れ奉りぬる事と、ひたみちに悲しう覺えしを、此頃の定にて思ひ遣らば、誰かは免るべき。されば如何にも如何にも、斯くて在る折に後れ奉る、なかなかいと好し。先だち奉る世も有らましかば如何に口惜しう、哀れに後ろめたる覺え給はまし。殿の御志の程も斯ばかりなりけりと見れば、唯だ如何にも如何にも志の限り仕うまつりぬべかめるなん嬉しき。唯だ此幼き人人の御有様どものみこそいみじう心苦しけれ。他人を見んなど思はばこそ有らめ、此御爲めに疎かなる事も、自ら出で來なん。今は唯だ斯くて在らんと思へば、堪へん程の限り育み奉りつべくなん。此幼き人人の御事に由りてこそ、尙侍の御事もいみじう覺ゆれ」など宣はせても、唯だ心弱げなる御氣色なり。また哀れ春宮に

思すらん事、如何にと思ひ遣り聞えさせ給ふ。殿ばらも打泣かせ給ひて、「其れ然る事に候ふ。世の中定め無ければ、げに後れ奉らせ給ふやうも候ひなまし。いとほしう侍りなまし。女の御幸ひは唯だ斯からんぞ本意に侍るべき。其夜の御有様など世の例に忝り侍るべきかし。殿も聞き奉り給ひて、いみじうこそ申し給ひしか」など聞え給へば、院、「春宮には一品の宮なん参り給ふべかなるなど、世には司召にすなるを、いで、其れ然も有りぬべき御事なれど、只今は、いつしかとさへ人の云ひ定むるも怪しからぬ事なり。此邊にも皆さまさま云ふなり。其れにても知りぬ、況いてともかくも人の申す」など宣はすれば、殿ばら、「いと物狂ほしき事にこそ候へ、萬つ誰れ誰れと有りとも、殿の御心より外に有べい事にも侍らぬに、只今は萬つ思されず、ひたみちに悲しさを思したるに、斯く世に人の物云ひ推し量り事の、いと事の外に心づきなう候ふなり」と申し給へば、「さて一品の宮は、兒にてほの見奉りにしが、いみじく愛くしう見えさせ給ひしを、況して如何に生ひ成らせ給ひつらん。さても見奉り給ふや」と宣はすれば、「御心と見えさせ給ふ事は更に候はず、不意には自らほの見奉る折も侍り。いと美くしうこそはおはしませ。御髪みかみの掛りさま、容態かたち、御聲ごこゑ、氣はひなどしも、世に尋常じんじょうは見え聞え侍らず。愛敬あいけいつき、貴きにをかしう、美くしき御有様にこそおはしませ。御顔ごかほなどはえこそ見奉り侍らねど」と申し給へば、「然おはすらん。兒ながらいみじう見まほしかりし御有様そや。さても御長ごながは幾らばかり」と宣へば、「四尺の御几帳ごいじょうに今少しは及ばせ給はぬ程に見えさせ給ふ」と申させ給へば、「哀れや、故院のいみじうし奉らせ給はんと思したりしものを、おはしま

さましかば、然りともよなからまし。然様に参り給ひて、思ふさまにおはせば、如何に嬉しからん。あさましう院の御名残無きがいとほしきに、人のする事にもあらず、我心と無くて有るとは思ひながら、いと物狂ほしき事ぞかし」と宣はすれば「只今いと萬づにまだ幼くおはしますめり。げにこそ院のおはしまさねば、心憂く口惜しう、されども殿如何で猶此御事を爲立てんと深く思したり、誰も世平よへいまり侍りなば、とかくも侍りなん」と申し給へば、「また内の大殿の御匣ごひら殿なん東宮にはと云ふなめり。其れも然るべき事に候ふぞかし。大臣は如何でと思ひ給ふらん。然りとも殿の御心にこそ候ふらめ」と申し給へば、「殿は何れをも思し捨つべき事かは。げに然るべき事に侍れど、事の次で毎には、今は唯だ姫宮の御事をのみなん思ふとこそ侍るめれ。東宮と固まりて皆おはしましつればこそ如何がと見奉れ、今は當りたる事にてこそは」と聞え給へば、「さらば何事にも仕らまつらんと思ふに、忌ま忌ましき事のみ有るぞ口惜しきや」と宣はすれば、「只今の事のやうにも仰せらるるかな」と打微笑み給ふ。殿ばら、「内の大臣は此東の對の宮をなん然様にこそは、即ちより世には申すめれ。其れは如何が思し定めさせ給ふ」と申し給へば、「彼れは故宮のおはしまし折、然様には彼の大おほ臣も申されしと聞き、また宮も然もやと思召したりしに、あさましう月頃惱み給ひしかば、何事もえ思し立たずなりにしにやとなん見えし」と宣へば、「其れはさて如何がと思す」と聞え給へば、「ここに思ふやうは、さて物せさせ給はんも適へなん。女はいみじう思せど、高きも短きも、怪しうのみこそ人は申し思ひためれ。また尋常にては齋院などにこそは居給はめ。其れめでた

き事なれど、罪深しと云ふ事をいと憂き事に思したりしかば、心苦しうこそは有らめ。くぬ島より初め、然るべき所ところ多く持たせ給へる宮なり。其れを好き御後見おんごしんなど有らば、いと目安くこそは有らめ。彼の大臣おんはいみじう戯あそしうて、故北の方亡せ給ひし程にも、便無き事ども聞えしや」など宣はすれば、「げに然る事ども侍る」など聞え給へば、院も「また有る節には御女の君をなん彼の大臣にもと宣ふと聞ゆるは」と宣はすれば、「東宮大夫こそ然様に申すなれど、彼の大臣も、さして然様に物せらるる事も侍らず、また此女も、まだいと幼う侍れば、何事も思ひ給へ掛けずなん。其中に母の世と共に弱體しう侍るめれば、其れいとほしき事に侍る。親無からん人の何事も然様にはまだいと堪へぬ事多かりぬべきわざにこそ侍るめれ」など聞え給ひて、何事にか、御堂に召しければとて、打續き出で給ひぬ。御堂には「などかいと久しうは」とて、「彼の御法事はいと近う成りぬらんを、如何が定められたる」とのたまはすれば、「此二十日の程となん候ふ」と申し給へば、「日頃解ば何事も覚えねばなん。参るべけれど、参りても別に居たらんがいと輕なればなん、細かなる事どもをばえ提て仕らまつらすや」とて、様様の物いと多く奉らせ給ふ由の御消息申させ給ふ。其次で、「世の中いと心細ければ、斯かる里住せじと思ひ成りにて」などのたまはするまに、涙浮かせ給ふに、殿ばらもえ堪へ給はず。殿の御前、「中納言殿の赤瘡の後、餘病こそいとほしう聞け、如何が有る」とのたまはすれば、「怪しう侍らざなり。かの大納言靜心無う騒ぎ惑ひし、病められたりとなん承はる。昨日は彼の姫君こそ惱ましうし侍れ」と聞え給へば、「其れも此赤瘡ならん」などのたまはすれば、「然

侍るなり」と聞え給へば、「尋常にも有らぬ人の大事にも有なるかな」とて御訪問に人奉らせ給ふ。此殿ばら退かて給ひぬ。院に参らせ給ひて、事の有様ども申し給ひ、尼上に御消息聞え給ふ。御堂には、大納言殿より、「畏まり承け給ひぬ。日頃中納言のいと苦しげに物し給へるに、見給ひ扱ひつるに、罷りて物し給へば、みだり心地少し寛舒め思ひ給ふる程に、昨日より此處に侍る人の、いと重く煩ひ侍るめるも、靜心無う見給へ扱ひ侍るに、そが中にも、尋常にも有らず、月頃もあさましう惱ましげにてのみ過くし侍りつるに、また斯く侍れば、何事も思ひ給へられずなん。さても他人は宜しうのみこそ侍るなれ。こはやがて苦しげに物し給ふめれば、胸ふたがりてなん思ひ給へらる」と申し給へれば、いみじういとほしき事かなと、また立ち返り、御消息聞えさせ給ふ。院にはやがて御法事は山の井にてぞせさせ給ひける。疎かならぬ程推し量り聞えさせ給ふ。關白殿、内大臣殿より、僧前、然るべき事ども、皆聞えさせ給へり。日頃院方の限りとのみ何事も思ひ定めさせ給ふに、今に成りて、斯かる事どもの有れば、いと僧の布施ども、數増さる事ども有るべし。僧どもいとおどろおどろしうて退かて給ふめりき。彼の大納言殿は例おはする所にも有らで、此頃は中御門に、今の肥後の守致光が家にこそ住み給へ。程なども狭き所にて、いと騒がしげなりとぞ。

榮華物語 中卷 終



昭和二年十二月十五日印刷  
昭和二年十二月十日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第一回  
榮華物語  
中卷

編纂者	同 謝野 宗野 敦
同 裝幀圖案者	同 廣川 松野 五郎
發行所	東京府北豊島郡長崎町一六二 長島 豊太郎
印刷所	東京府北豊島郡長崎町一六二 新樹製版印刷所 高瀬 清吉

發行所

東京府北豊島郡長崎町一六二  
日本古典全集刊行會

電話 東京七三〇三二  
大塚二〇九六

(荒井印刷所印刷)



姓名	性别	年龄	籍贯	职业	住址	备注
李德全	男	45	湖南长沙	教师	长沙市	
王德全	男	35	湖南长沙	工人	长沙市	
张德全	男	25	湖南长沙	学生	长沙市	
刘德全	男	15	湖南长沙	学生	长沙市	
陈德全	男	55	湖南长沙	工人	长沙市	
周德全	男	40	湖南长沙	工人	长沙市	
吴德全	男	30	湖南长沙	工人	长沙市	
孙德全	男	20	湖南长沙	学生	长沙市	
赵德全	男	10	湖南长沙	学生	长沙市	
钱德全	男	60	湖南长沙	工人	长沙市	
周德全	男	50	湖南长沙	工人	长沙市	
吴德全	男	40	湖南长沙	工人	长沙市	
孙德全	男	30	湖南长沙	工人	长沙市	
赵德全	男	20	湖南长沙	学生	长沙市	
钱德全	男	10	湖南长沙	学生	长沙市	

湖南长沙... 1949年...

湖南长沙... 1949年...

湖南长沙...

終

